

●特別講義●

〈第30号〉

最後の文書整理と目録編成

—佐渡国加茂郡原黒村(現・佐渡市)鵜飼家文書—

山  
田  
哲  
好



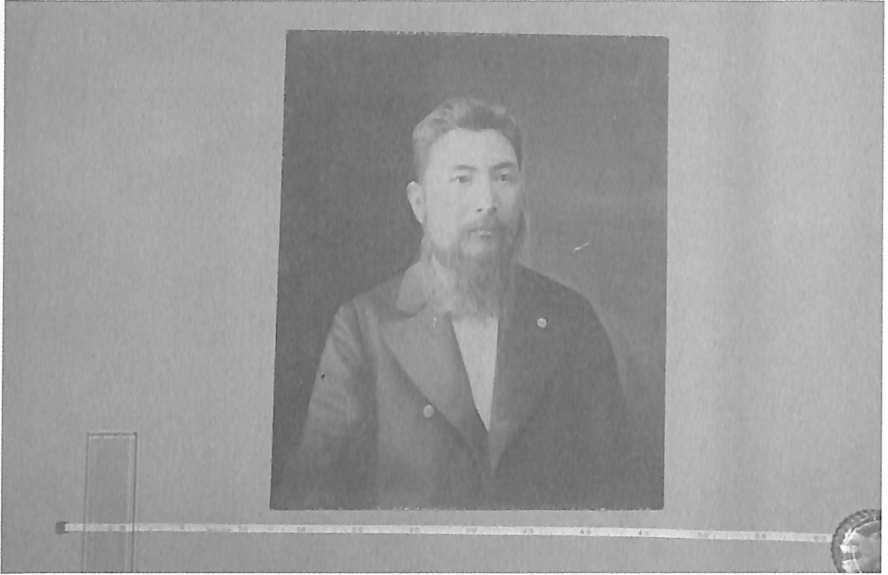


写真1 鵜飼郁次郎肖像写真



写真2 鵜飼家正門



写真 3 鵜飼家文庫蔵



写真 4 鵜飼家文庫蔵扉

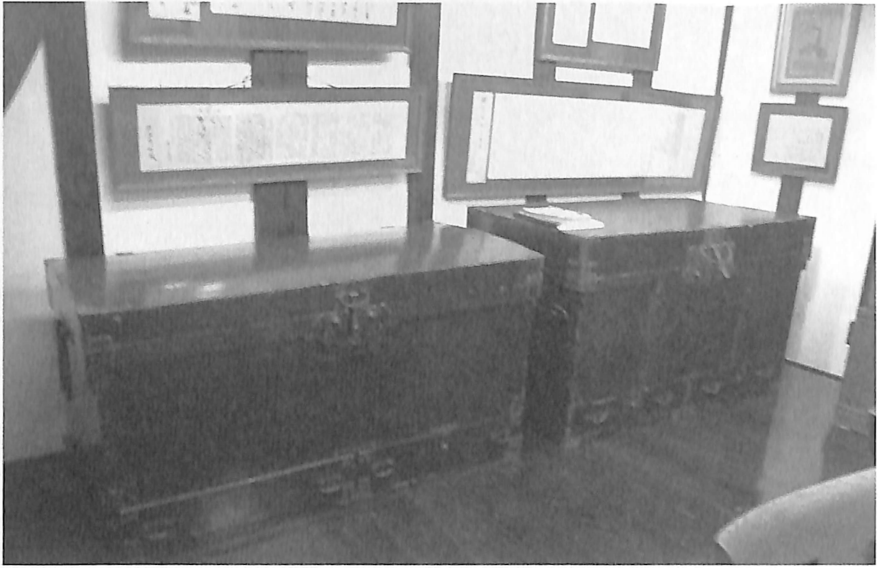


写真5 鵜飼家文庫蔵1階左長持



写真6 鵜飼家文庫蔵1階左長持内





写真7 鵜飼家文庫蔵1F正面書棚



写真8 鵜飼家文庫蔵2階

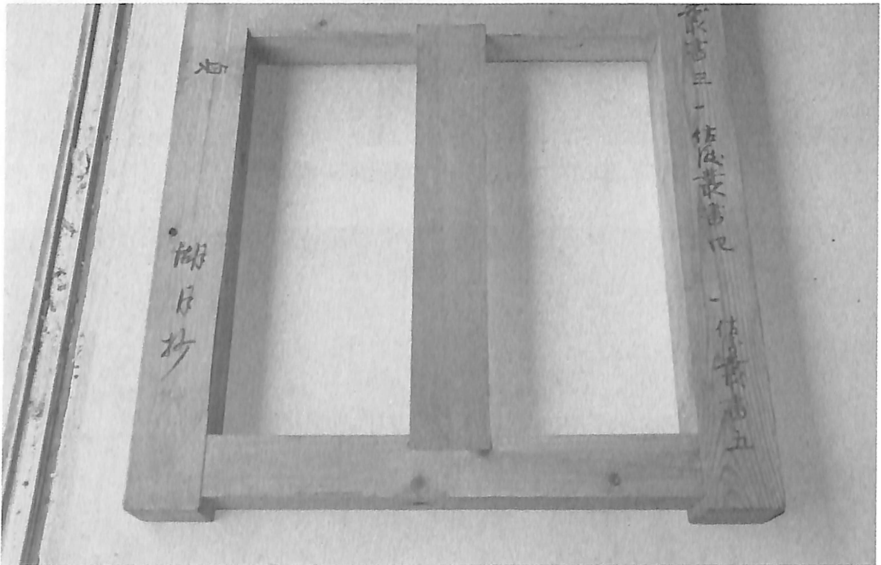


写真9 鵜飼家文庫蔵2階典籍用簀子

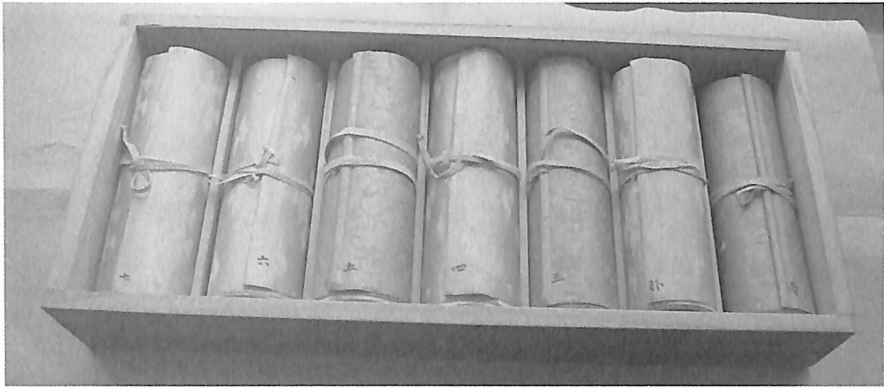


写真10 7巻収納木箱

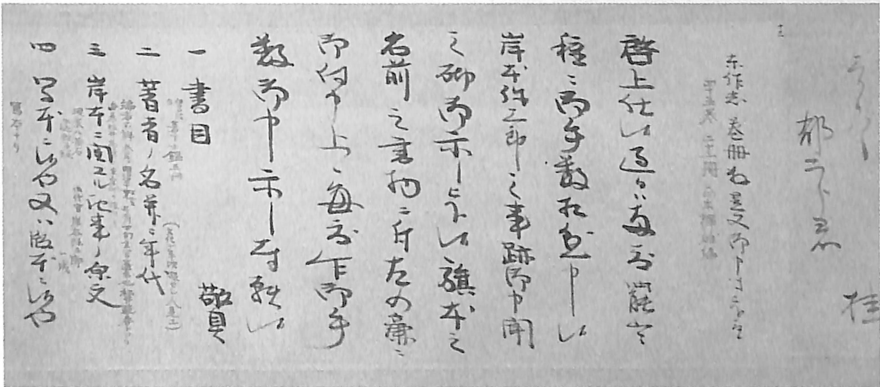


写真11 郁次郎田中稻城宛書翰①

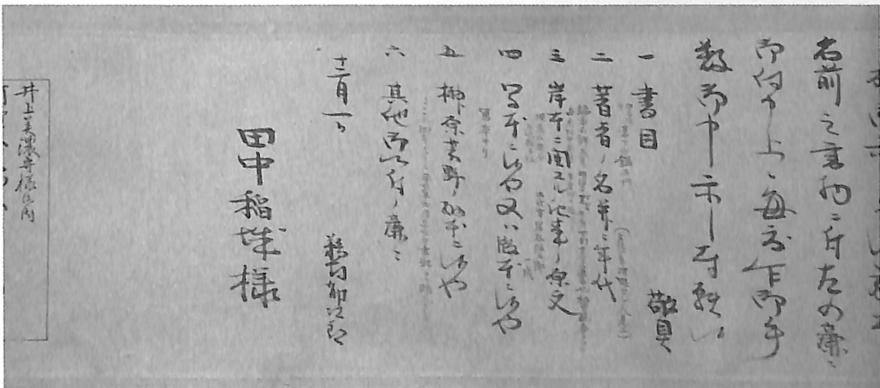


写真12 郁次郎田中稻城宛書翰②

総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻／2015-17

平成二十六年 第二回日本文学研究専攻特別講義

## 最後の文書整理と目録編成

—佐渡国加茂郡原黒村（現・佐渡市）鶴飼家文書—

山田 哲好



専攻長 日本文学研究専攻の専攻長をしております山下則子と申します。本日は遠路はるばる多くの方々にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。先ほど国文研のほうでは新年の館長挨拶があつたのですけれども、そこにあつたように、基盤機関のほうでは、最近大型プロジェクトの歴史的典籍データベースの仕事が加わり、非常に忙しい状態になっておりますが、どうか大学院の仕事も充実させていこうと思っております。

そしてこの二〇一四年度の最後の特別行事となります特別講義ですけれども、このところ例年、最終講義を兼ねるといふ形になっております。

今回は山田先生の最終講義ということになります。今回は川平先生が非常に遠くからいらしていただくので雪を心配いたしました。川平先生に後でご発表いただく段取りになっております。先ほど申しましたように、大変慌ただしい日常で、我々もなかなか研究の話もできないような状況ですけれども、学生にもまして、今回はいろいろなお話を伺えることを楽しみとしております。それでは両先生、お願いいたします。

司会 お二人の先生にご講義をいただきますが、まず最初にお話しいただきます山田先生について、簡単にご紹介させていただきます。

山田先生は、一九四九年、北海道のお生まれであります。高校卒業後、札幌での予備校までは地元いらつしゃいまして、その後東京の立正大学に入学されて、大学院も出られまして、一九七五年国文学研究資料館にお勤めになりました。一九八九年に教官に配置換えとなり現在に至ります。

この間教育関係では、総合研究大学院大学は勿論、母校の立正大学、そして千葉大学、近年では一橋大学や中央大学でご講義をされ、若手後進の指導に当たられているということでありま

す。専門は、歴史学、あるいは歴史情報学といったらいでしょうか。それからアーカイブズです。大学等では博物館学の講義も担当されており、大変幅広く、それらはいずれも、資料を守るとか、資料を読み解くというような専門にかかるものです。館の活動においても、その研究を活かされて、さまざまな活動に関わっていただきました。

一つは、一九九〇年代が中心になりますが、歴史学界全体からの要請もありまして、全国の歴史関係史料の所在情報集約に関わる事業を、大変大がかりに長期にわたって進められ、成果をデータベースとして公開されました。戦後間もない時期に実施された庶民生活史料調査を引き継いだものであり、特筆すべき成果といえるでしょう。また、アーカイブズ学の国内文献のデータベースも一九九〇年代から現在まで担当されています。

それから、史料研究では、北海道の名付け親として著名な松浦武四郎家文書の研究、松代藩の史料集刊行とその関連の研究などで具体的な成果を上げられています。また、近年の伊勢商人長井家文書の研究では、科学研究費の交付を受ける代表者を務め、三年間にわたり現地にある資料の整理・保存・公開活動に尽力されました。さらに、これも近年のことですが、データベース関係に大変詳しいこともありまして、現在寄託されている増田太次郎広告コレクションの整理・目録作成とデータベース公開を実現されております。

そして注目したい点は、今日お話しいただきます鶴飼家史料の研究にも共通することですが、研究の大半が職場の事業等に関わって深められてこられたことです。机上の学問ではなくて、実際に多くの作業を通じての成果である点が特徴です。レジメを拝見すると今日のお話も、鶴飼家史料一点一点を読み解く作業を通じて、まとめ上げられています。どのようにすれば、史料群の情報的価値を引き出せるか、そのような点に注目してのお話のようです。

本日は、鶴飼家文書の所蔵者である鶴飼（重行）様にもご参加いただいております。早速、山田先生にご報告をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

山田 皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました山田です。

私は、順番が回ってくるとは思わなかったんですけども、確か今までの噂では、定年になる人が一人だったら、役を免除されるよといったようなことも聞いていたので、それで私の番が回ってくるとは思わなかったんです。

そこで、あと三か月でいよいよ館を去らなきゃなりませんので、その最後に関わった、タイトルにあります佐渡国加茂郡原黒村鶴飼家文書の整理と目録編成をテーマとしました。この鶴飼家と会おうのも全くの偶然がきっかけで、鶴飼さんともお会いすることができました。整理作業日程としては、当初よりかなり遅れてしまいましたけれども、私が現職でいる間に、どうにか済ませたいといったようなことで、還暦を過ぎてからは、やっぱり体調が全く異なりますので、老体に鞭打って頑張ってきた次第です。その一端を、今日これからお話し申し上げたいと思います。

資料は四部立てで、皆さん方のお手元に配ってあると思いますが、それは適宜その場面で参考

にしていただけだと思います。今日は、五つの章立てでお話を進めたいと思います。

まずは、鶴飼家が居住する原黒村という村の概要と、それから今までに至るまでの地名の変遷というのを確認しておきたいと思います。

それから二番目には、鶴飼家が一体どういう家柄で、どういう職業、あるいはどういう人を輩出したのかといったような鶴飼家の概要。

それから三番目は、鶴飼家文書のこれまでの調査歴というのがやはり非常に大きなことであります。それが、私どもの館に何で、どういう理由で収蔵するに至ったかという、そういう経緯もきちっと押さえて、記録として残しておくということも、文書・記録類を管理するという上では重要ですので、それを確認していきたいと思います。

それから、私どもの館に受け入れてから、これまでどういうような方法、例えばどういうような整理方針でもって臨んだかということと、それから具体的に目録編成をやるにはどういうことに留意したかといったようなお話であります。

最後に、目録編成だけのお話では、余りおもしろい話でもありませんので、幾つか、私が皆さん方にご紹介して、少しでも役に立つかなと思うようなことを何点か、トピックとして取り上げて、それには写真も紹介しながら進めることといたします。また鶴飼家文書の特徴と学問的な位置づけといったようなことにも触れて終わりにしたいと思います。

それでは、皆さん方にも同じスライドを配布してあります。まず村の概要を簡単にご説明いたしたいと思います。



## 一 村の概要と地名の変遷

加茂郡原黒村かもぐんはらくろむらと読みます。享保四年に城腰村という村名でしたけれども、そこに原黒組というのがあつて、それが原黒村として独立の扱いを受けて成立するのがきっかけであります。村名が原黒というふうになっていきますけれども、これは通常焼畑農業っていいですが、そこら辺の草むらを強制的に燃やして、燃やした後に、佐渡では焼蒔というそうです、その燃えた跡に、雑穀の種をまいて、そこから収穫を上げるといったような、農地の開発、開墾にも繋がるというようなことで、ですから焼き畑をすると、畑が黒くなるから原黒という名称だそうです。

支配は、佐渡金山がありますので、佐渡奉行支配下である幕府領、天領ということになります。宝暦年間の村高は四三五石余、田が九町余りで畑が二三町ですから、断然畑がちの村であります。この当時の名請人は六一名というのが記録に残っております。それからちよつと下りまして、天保一二年では、村高はほとんど変わらなく、また田も畑も変わらなのですが、家数だけは若干増えていて六五軒、総人数はこの一カ村でこの当時三五〇名弱ということになっております。

寛文二年ですから、一六六〇年代ぐらいですか、能登の船頭がたまたまどり着いて、揚げ浜式の製塩を伝えてから、この原黒村では製塩が非常に発達いたします。元禄七年の塩畑は、一町歩弱。実際にこの塩畑をして名請けをしているのは一五人もいたということです。文政一三年の製塩高というのは、何と千二百石余り。嘉永元年の製塩予定高はその三倍ぐらいにもなつて、そ

のうちもう既に二千石弱は売却済みであるということですから、この塩田でもつての収入というのは、大変大きなものがあつたと思います。

次に現在までの地名の変遷は、原黒村というのは明治二二年まで継承され、明治二二年からは明治村、三四年から河崎村、さらに昭和二九年には両津市、新潟から佐渡に行く高速船(ジェットフォイル)に乗つたら着く港であります。で、ご承知のように平成の大合併で一六年三月一日をもって、佐渡の一島全体が佐渡市になつたということです。その時点では、一市(一市というのは両津市であります)、と七町二村であります。

## 二 鵜飼家の概要

では次に鵜飼家についてご紹介したいと思います。鵜飼家には系譜とか、あるいは過去帳類がありますけれども、そうきちつとした詳しいものではなく、線が引つ張つてあるとか、というものではないです。現ご当主でいらつしやる鵜飼さんも、さまざま関係資料史料を見て、系図を調べられました。どうもそれぞれの系譜によつて、現ご当主の代までには、一代ぐらいずれるとといったようなことを、現地の調査で伺っております。

ですから、今現在でも確定した最新のものはまだ把握できておりません。ただ一番新しく、現ご当主がお作りになつたのは二〇一一年版だつたと思えますけれども、今のところはそれに準拠し、現ご当主が一代になります。以下これに対応して、お話を進めることといたします。

それで、近世では、ほとんど鵜飼家の名前は源助、あるいは屋号の酒田屋という名称で文書に頻出したします。その酒田屋という屋号につきましては、後で触れることにいたします。

それから、では近世で源助というのが、どういう役職を担っていたのかというのを、文書の作成者、あるいは宛名について全部調べた結果がそこにあるような状況になりました。名主としては天保二、三、一二年と嘉永五年、組頭としては寛政二年、文化一四年、文政一〇、一四年、慶応三年、百姓代だと寛政一年、文化五、一〇、一三、一五年という結果となり、いわば村方三役を寛政二年以降、総期間ではないんですけども、例えば文化一三年には百姓代、翌文化一四年には組頭になって、さらに翌年の一五年には百姓代にまた戻るといふ、一年単位ぐらいで交代しています。

どうも鵜飼家文書には鵜飼家宛ての土地証文がたくさんある一方（享保六年を初見）、鵜飼家宛てではなく、ほかの家宛ての土地証文も、鵜飼家とは直接関係ありませんが、大量にあるんです。それもまず考えられないことですけれども、よくよく調べてみたら、土地移動に関わる証文については、どうも原黒村では、村方三役が証文末尾に奥印するということが慣例のようで、従って直接鵜飼家と関係ないような文書も、その村方三役を勤めたことに起因して残るようになったのかなと思います。

ですから、そういうのを見ても、名主をはじめ村方三役が頻繁に変わっていることから、世襲じゃなくて、輪番制を採用していたものと思います。

それからほかに役職はどういうことをやったかどうかの関連で見ますと、「質屋組合年行

事」、行事の「事」という字、すみません、変換ミスで間違っていますね。「司」です。ごめんなさい。訂正をお願いいたします。

それから、「両替商」というのが出てきまして、これは天保一一年の文書で両替職の御免願いなんです。それを奉行宛に願ひ出ているんですね。ということは、要するに、お上からの命で強制的にやらされたか何か知らないですけども、要するに、私的な仕事ではないだろうということ、私の考え方としては公職の方に入れました。だから両替商というのは、いわば、半ば公的な職業として今までやっていたんだというのがわかります。ただ、両替商に関わつての文書はこのぐらいで、ほか見ることがないんですね。だからちよつと、実態がどこまでわかるかというのは疑問であります。

それから実際に鶴飼家の家としての経営については、これは享保六年を初見とする、近隣の諸村から質地として土地を大量に集積しております。ということは、鶴飼家宛ての質地証文が非常にたくさんありますので、地主経営といったようなことが成り立っていたんだというふうに思います。そのほか質地ではなく金銭譲渡された土地証文もあります。

因みに、地租改正のときの地券、それは専用の、木箱に入れられて、恐らく完璧な形で一枚も欠けることなく残っているんだと思います。全部で一八〇枚ほどあります。そういった保存の方法についても、ちよつと後ほど触れてみたいと思います。

それから、酒造業も始まります。これは潟上村上組の酒造家であつた十助という者から酒株を一株買い受けてから開業いたしますけれども、その開業のために、わざわざ「石の蔵」という酒造



り専用の倉庫一棟を建築しております。これがきつかけとなつて、号を酒田屋と称するようになります。ですから文書には、「酒田屋源助」が頻出します。

それからもう一つ、鶴飼家にとつては非常に重要な、特筆すべき人物がおります。今のご当主の鶴飼さんの三代前の当主ということになりますが、それが八代の玲吉というのが、明治一六年にわずか二一歳で亡くなりました。そのために、同年の九月に、雑太郡竹田村、今、その地は真野ともいっていますが、そこに生まれた羽生郁次郎という人が、つまり羽生家から、後夫として鶴飼家に入ることになります。この郁次郎という人が、どういう人かというのを今……（スライド調整のやりとりあり）……これが現在鶴飼家に残っております郁次郎の肖像写真であります（写真1）。今皆さん方に示した「資料—1」（鶴飼郁次郎年譜）は、現ご当主が最近になつてお作りいただいたもので、それをそのままの形で皆さん方に提供いたしました。私が、改めて作つても大して変わりがないようなことになるんじゃないかと思つてのことです。

この郁次郎が学問を究める一番のきっかけとなつたのは、若いころから圓山溟北という地元（相川）の有名な和漢の先生がしまして、そのの門に入るのが一二歳であります。その後新潟師範に行つて、帰つて来た後には、さまざまな学校の先生を、あちこち歴任いたします。二四歳のときに、お母さんの帰京命令によつて、またふるさどに戻つて、溟北の門に再入学するということになります。

二五歳の時には、これが非常に彼にとつても大きな出来事になつたと思いますけれども、全国に国会開設の世論が高まつた時であります。それを、国会開設哀願書というふうになっています

が、国会開設の請願書ですね。それを、新潟県内二六〇名ぐらいの署名を集めて、実際に東京に新潟から持っていった代表をこの郁次郎が務めたということですよ。何回か直接会おうとしたのですけれども、結局担当大臣(元老院太政大臣三條実美)には会うことがなくて、ただ置いてきただけに止まったみたいですよ。これがきっかけとなり、三〇歳の時に、加茂郡の県會議員に立候補して当選します。これが一つの、政界に入る大きなきっかけになったことは間違いありません。

それから、三五歳の時に、初めての第一回衆議院議員に立候補して、見事当選いたします。それ以来、実際に議員を務めたのは一回目と二回目で、三回目はだめだったのですが、その間に、具体的に活動したのは、今お示した(鶴飼郁次郎年譜)ものにずっと上げられておりますけれども、それを一々読むことは時間の関係でいたしません。ただ、やはりこの郁次郎は、一番最後のページに、建議案件が五つほど上げられておりますけれども、特にこの中で、新潟航路ですね。それと海底電線の敷設、これにはものすごい力を入れておまして、そのほか兵役課税に関わる建議案とか、曹洞宗の、いわば分割騒動があつたんですが、これら五つ案件に関わって、さまざま関係の議員、あるいは関係者(官僚)とやりとりした書状というものが、膨大な量が残っております。それはまた後にご紹介いたします。

ところが、この郁次郎は、わずか四六歳で若くして亡くなります。この後の息子さんは、まだまだ、確か仙台か……東京でしたか……まだ仙台でしたか。息子さんは、今の東北大学に行っていて、しょっちゅう学費などが足りないから送ってくれだとかって、お金を催促するような手紙

が残っているんですが、そういうわけで、この郁次郎が亡くなった後は、息子さんもまだ若いものですから、鶴飼家にとっては大変な、いろんな意味での困難な時期を迎えたんだと思います。その点については、また後ほどちょっと触れることになろうかと思えます。

### 三 鶴飼家文書の調査歴と当館収蔵経緯

次に鶴飼家文書の調査歴と、私どもの館に入る収蔵経緯について簡単にご説明いたします。

徳富蘇峰（昭和五年採訪時の記念写真あり）とか、和歌森太郎・大江志乃夫（昭和四五年採訪）とか、そうそうたる先生方が既に鶴飼家を採訪されております。また慶応大学斯道文庫（平成三〇八年採訪）も六年間に亘り調査されております。当館は、平成九〇一八年の間に九回ぐらい、この調査は文庫蔵の二階に収蔵の古典籍を中心とした調査でありました。

私が鶴飼家文書を担当するきっかけとなったのは、そうですね、平成二二年の調査からになります。実はこれまでには、現ご当主は、今は東京にお住まいですから、国文研が鶴飼文庫の調査の際には、日程を調整して佐渡までご一緒していただかなければならないといったような様々な事情がありました。また当館も、品川区の戸越公園から立川市緑町の新館に移転したのが平成二〇年三月でして、これを契機に是非寄託したいというご希望を表明されました。それも2階収蔵の古典籍と1階収蔵の文書・記録類を含めてということでした。そのご意向を請けて、事前調査の必要があるというので、行ってくれないかといったようなことで、最初は私ではなかったん

ですが、その方が急に体調を崩して行けないということで、全くのピンチヒッターで私が参加することとなった次第です。

それ以降、鵜飼さんが熟慮を重ねられ、最終的には、典籍と文書記録類両方合わせて国文研に寄贈したいという、大変私どもにとってはこの上もないご配慮を示していただきましたので、平成二三年八月二日、美術梱包車で佐渡から搬出、翌三日当館搬入までの作業立会を今西館長、大高先生などと共に担当いたしました。同年の十一月一四日には鵜飼さんに感謝状をお渡しすると同時に、今までの文庫保存の方法などを中心に、大高先生と一緒に鵜飼さんに詳しくお話を聞かせていただいたというような経過になります(「鵜飼文庫」資料の寄贈—鵜飼重行氏に聞く・資料紹介—『国文研ニュース』No.二六)。

ただ、文書・記録類については、もう数一〇年も前から、「現地保存主義」という考え方が定着しております。というのは、そう難しいことはありません。それぞれ文書・記録類が作成され、伝来したその地域でもって、しかるべき史料保存利用機関や個人のお宅でもしっかりと保存していただく、あるいは個人のうちで保存できない場合は、史料の保存利用機関、あるいは図書館でも博物館でも、といったようなことになりましたけれども、基本はまずは現地において保存し、現地の人に利用してもらおう、これが「現地保存主義」ですけれども。それが定着していますので、私どもも鵜飼家の文書・記録類を当館に収蔵するに際し、まずは、佐渡市の教育委員会の関係者、それから当然でありますけれども、新潟県の県立文書館、そちらにも事情をお話し申し上げて、それは構いませんといったようなことで、いや、だめだからと言って収蔵を断念するとい



うそういう意味ではないですけども、きちんと事前の連絡をしております。

#### 四 鶴飼家文書の整理と目録編成方針

次に鶴飼家文書の整理と、目録編成方針の基本的な考え方について簡単に説明したいと思えます。

まず整理が、実はさっきの調査歴にも記述ありましたように、平成一四年の八月に新潟県立文書館の方々五人と、それから地元の両津市の方々とが七、八人で、まず「手書き目録」を作り上げたということです。で、それは、一点一点全てやるというわけにはいきませんので、一括処理をした場合があります。点数の多い場合は「ほか何点」、あるいは「ほか多数」といったようなやり方があります。この調査では、各容器ごとにAからIまでのアルファベットが付与され、なおかつアルファベットごとに通番が付与されて「新潟県立文書館」専用の封筒に収納されておりましたので、まずそれを踏襲するということを基本としました。今回の整理は、可能な限りの詳細目録を目指したので、「ほか多数」は解消しアイテムレベル一点ごとの目録を作成することとしましたので、点数が多くなった場合は、通番を増やすことになりましたが、「手書き目録」には何番まであって、何番以降は新たに私どもで加えたといったような情報ですね。ですから、我々が目にした現状を最重視したという形になります。

それから具体的に目録編成ですが。目録編成というところとちょっと聞きなれないかもしれませんが

が、目録編成というのは、個々の文書を、文書群単位の中に位置づけて、その存在の意味を理解しようとすることであります。今自分が手にしている文書は、どういう理由で今私が見ることができなのか、そこに残っているのか、では残った理由は何なのか、存在の理由は何なのかといったようなことであります。そのためには、文書が含まれる文書群全体の階層構造といえますけれども、またそれを体系的秩序ともいいます。それを、発生母体である組織だとか、今回の場合は、鵜飼家の職歴、あるいは家の機能といったようなその活動の実態を理解して、それに合わせた編成をするということでもあります。これがアーカイブズ学の視点に立脚した文書の科学的認識でもあります。

したがって、鵜飼家の場合は、鵜飼家の職歴、役職、活動歴などの把握が不可欠でありまして、それが済んでから、階層構造は、フォンド・レベル、というのは鵜飼家文書全体のこと。それからその下のレベルをサブフォンド・レベルといって、その場合は例えば村役人、それから戸長、あるいは郁次郎の場合だったら国会議員といったような、そういうようなサブフォンドを設けて、その中をさらに幾つかの階層のレベルに分けていくということになります。

ですから、私がやった目録編成を、ほかの人がやって全く違うものになるのではまずい(科学的ではない)わけであります。つまり、誰が整理をやっても、ある一つのきちっとした方針でやれば、ほぼ間違いなく同じような目録になるというのが、一番望ましいことだと思います。

家文書の場合、個々の家の職歴や来歴は家数と同じようにまちまちでありますので、文書は従

前一部で採用されていた事項別分類表に基づく「分類」は否定されつつあり、図書館での「日本十進分類法(表)」「(NDC)」といった統一的分類は文書の世界では無縁であります(欧米のアーカイブズ学に関する文献では、もっぱら「arrangement:編成」という用語しか使用していない)。「classification:分類」という用語は使用されていない)。

鶴飼家文書の目録編成と記述については、目録記述の方法ですけれども、単に、これ以上物理的に小さくできないという一点ごとのアイテムレベルの情報だけではなくて、まずはフォント・レベル、つまり鶴飼家文書全体はどういうような傾向の文書なのかという記述から、各下位レベルの記述、そのままとまりごとに情報を提供する必要があるというのが、今世界的な流れになっておりますので、全体の目録編成を終えてから記述することになります。本文書群ではアイテムレベル、つまり一点ごとの記述では、例えば郵便葉書とか、あるいは郵便封筒で送られてきた書類は三千点を超えています。今は余り書く人がいなくメールが主流となっておりますが、その大半は、何年という表記はなく、何月何日、ひどいのは何日しかない。それは何年のことなのかというのは、よっぽど家の事情、あるいは書いてある内容に精通していないと、年代確定というのはまず難解であります。さらに、特に私信の特徴でもありますが、当事者同士はお互いに判っているわけですから、主語や述語の省略も多く、「例の件で話があるから」といったようなことです。ではその「例の件」というのは何だということになるんですね。そこまで理解しないと、本当の意味での内容把握にはいけません。ですから、こういったものについては、消印が非常に重要な情報になるので、それは拡大鏡でもって一点一点確認に努めました。消印は、ご承知のよう

に、何年何月何日までと発信局名もあります(発信人名だけで住所表記ない場合もあります)。だからこれが少し、私の頭みたいインクが薄くなってるものはどうしようもないことですけどね、それを、できるだけやりました。で、その消印からそういう情報を採用したということも、全て明記してあります。

整理の現状ですけれども、今現在、もうこれで変わることはないと思います。総点数八、〇四三点になりました。当初予定では、四、五〇〇点と予想していたんですけれども、書類・葉書類も含めて、あるいは綴り文書も可能な限り一点ごと枝番付与して採録したため、つまりこれが最終整理だと思つての採録の結果かもしれませんけれども、倍近くになったということです。

一番今悩んでいるのが、先ほども言いましたように、大量の書簡・葉書類であります。同一人物や、あるいは組織から、多い場合は五〇通ぐらい送られている場合もあります。差出人別で、編年順として、宛名で区分するという方法が最善策だろうと思います。だから今その準備もかなり進めておるところです。ただこういう処理をするにしても、数名連名、例えば五人連名で出している場合は、一人ずつそれを重出させるとか、できるだけそれを取りたいと思うんですけれども、それを考えると、ちよつと明日から眠られなくなります。

ここで、ちよつと参考までに、「資料―3」をご覧いただけますか。「資料―3」は、平成一四年に新潟県立文書館等が調査したその調査報告がこれに当たります。「収納容器別一覧表」という表題で、その当時はAからTまで、その各概要が表になっております。大体、これはどういう容器に入っていて、その中は、例えばBの行李だったらどういものが入っているのか。つ

まりこれがサブフォンド・レベルの極簡略な記述ということになります。これも非常に重要な情報であります。このまとまりがどういうまとまりなのかということですね。

一番右側に点数と書いてありますけれども、これを足していきますと、一番最後にあるように、合計四、三七二点、多少ふえても四、五〇〇〜六〇〇点かなというふうに思っていたのですが、今現状は、その欄外に書き入れた数値の通りであります。当初より倍以上のまとまりが圧倒的に多く、U・Zは、全く新規の容器や置き場所からのまとまりで、九〇〇余点となる。Nの葉書は、二五〇〇点と概数だけの記載はあるものの、手書き目録は約二、四〇〇点だけで他多数と処理されていた。

それから次には、「資料―4」（「鶴飼郁次郎宛書翰・葉書類発信者リスト」）をご覧ください。宛名が鶴飼郁次郎のものをだけを、書簡と葉書を全部拾い上げ、具体的にその発信人は誰で、どういうような人物なのかといったのをまとめ上げたりリストです。私なりに、【国会・省庁・国会議員】とか、職種や地域で分けましたけれども、これがまず基礎データになります。実はこれが序の口なんです。例えば、ページで言いますと、鶴飼文庫の文庫形成に最も関係のあるのは、五一ページですね。五一ページの中段から、【出版社・書店・古書店・古物商】というふうにあります。そこに、神田の古書店・朝倉屋久兵衛、これだけでも五〇〜六〇通ぐらいあるんじゃないでしょうか。この整理番号が一点という意味であります。郁次郎に宛てた朝倉屋久兵衛からの書翰・葉書類はこれだけあるけれども、これをそのまま並べても余り意味がない。できたら、それぞれの一点ごとに年代を確定して、さらに年代順に並べたら、よっぽど便利なこうい

た書簡・葉書類の目録ができれば上がるだろうと思います。まだこれはその基礎データに当たる部分です。

それで、今は文庫の形成についての話でしたので、今そこが上がっている情報交換や取引のある古書店はもう相当数に上ります。基本的には東京が中心になりますけれども、地方では名古屋、それから大阪、京都まで、そういう店と情報交換しているというのがわかります。それと、郁次郎は、いろんな古物、古いものにはかなり興味があつたみたいで、特に古銭にはえらい興味を示しておりました。ですからここに、亀田一恕という古銭商が、非常に大きな情報源となつて、収集するきっかけとなつたと思います。それから、画銭譜。「が」は映画の「画」ですね。

それから「銭」、系譜の「譜」です。つまり古銭の図鑑ですが、それを編集した研究者とも繋がりがあつた。これは研究者のところに出ております(馬嶋杏雨)。こういった郁次郎との交友関係がこれで一目でわかるということになると思います。

それから最後のところには、「新潟県内関係」の人たち、それから「佐渡関係」、そして一番最後には「鵜飼家関係」に関わつて、郁次郎はその羽生というところから来ましたので、羽生家に関わる者も皆、鵜飼家のご家族というふうにかけてそこにまとめ上げたものであります。同じ羽生でも、本来の羽生家とちよつと関係ない者がいるかもしれないませんが、羽生家の系譜類については一切持ち合わせておりませんので、とりあえず今そういう形にしてあるということです(郁次郎宛の書翰・葉書類は、全体で約三、〇〇〇点、この一覧に採用したのは発信人物が特定できたものに限定した約一、七七〇点である)。

それではここからトピックとして、皆さん方にもぜひ紹介しておきたいという事例をご紹介します。まず、これまでの鶴飼家における文庫の維持管理、保存の問題であります。近いところでは大正一五年に延焼火災で、土蔵三棟は残ったんですけれどもそのほかは灰燼に帰したんです。ですから、それをきっかけに、土蔵三棟を一カ所に移転して、永久的建物に改築工事をやります、それが今現在使っているものであります。今写真を……これが今、地元の鶴飼家の正門に当たるところで、車がありますけれども、その左にある建物、その中に蔵があります（写真2・3）。これが近寄ったところですね。一番外側の戸を開け、蔵の観音開き戸を開けたところですよ（写真4）。ざっと見ていきます。これ一階ですけども、一階には文書・記録類、二階には典籍類が置いてありまして、これは一階の、入り口から入ってすぐ左側にある大きな長持ですけども、立派なものです（写真5）。これをあけると、もう既に、こういうような形で、これは上からのぞいたものですね（写真6）。こういう木箱に入っていたりとか容器を尊重しながら、新潟県立文書館の人たちが一点ずつ袋に入れてありました。これはGだとかFだとかというアルファベットの仕切りまで入れ、こういう形で整理をしていたということです。これは、文書もこういったガラス戸の棚に収納している場があります（写真7）。これは二階の古典籍を置いてあるところですよ（写真8）。ほとんどが、もう皆さんご承知のように、専用の木箱に納めてありまして、四方の壁、それから真ん中の通路にも、非常に効率よく配置されていてかつ固定化にも配慮されております。

その固定化で、こういうものがあります。これは佐渡叢書というふうに書いてあって、これ一

連のシリーズ本であります。これは、ここに佐渡叢書五、その上は佐渡叢書四、その上は佐渡叢書三。ここに『湖月抄』というふうに墨書があります。これは何かというと、この二階の木箱を置くために風通しをよくするための簀子なんです(写真9)。この土蔵は、頻繁な開閉もなく、かなりいい環境を保っていたと思うんですけれども、それにも関わらず、なおかつこういうふうな養生をして、なおかつその配置の順番までを確定させ、風通しまで確保しようとした形跡であります。ただ、今はその蔵の隣の物置に置いてありますけれども、私は注目して写真を撮っています。

それで、実は、郁次郎の恩師であった圓山溟北が亡くなった(明治二五年)後、やはり圓山家と交流はありまして、圓山家から郁次郎に宛てた明治二七年の書状があるんですけれども、それにはこのように書いてあるんですね。びっくりしました。「かつまたこの日、相川の噂には貴兄有志諸氏とご協議の上、書籍館設立の美拳これある由、実にわが佐島の名誉と存じ奉り候」とあるように、郁次郎たちの有志が佐渡において、書籍館というのを設立するという、そういう協議までしていたということであり、まさに地域に密着した書籍館構想であったと思います。

それから次に文庫の収集先ですけれども、先ほども言いましたのでこれは詳しく申し上げます。これは読むだけにしてください。

それから、現在は、七巻の卷子仕立てになったものが、専用の一つの木箱に納められております。私は最初それを見たときは二回目の調査でしたが、郁次郎が亡くなった後、いろいろ鶴飼家の、何というんですか、面倒を見ていた支配人のような小池龍蔵さんという方がいて、その方が



指示して仕立てたんではと思つていたんですけれども、明治三二年に、新潟市の表具師中沢丑太郎という表具師（リストでは「商人・商店」の中）に発注したようで、その仕立て代金が二円五〇銭という請求が来ているんですね。この二円五〇銭というのは、レジメに書いてあるように、そういう根拠からすると、今現在の約五〇万円くらいになると思いますので、たった一卷や二巻じゃないでしょう。それだったら、あの七巻をこのときに頼んだのか、とすれば、郁次郎は、明治三四年に亡くなっていますから、亡くなる三年前になります。七巻仕立てに書状を選択する行為は、郁次郎自らがやったんではないかと、思いを改めています。

ところが、それを見ますと、ひどいんです技術が。全くの素人なんです。これがその七巻仕立てになっている木箱の蓋をあけたところ（写真10）。こういうような状態になっている。これを見てもわかりますよね。かなり慎重に巻いてもブヨブヨなんです。加えて驚くのは、本紙の天部が文字の一部分が裁断されているのも散見されます。どうもこれだけはちよつと、目を背けたくくなります。ただ郵便葉書を表裏剥離しての装丁は納得するのがあります。

それで、次には、もう二つぐらい紹介してみることしましょう。書翰・葉書類は、一点ごと読んで内容も採録したのですけれども、この鶴飼家の典籍の中で特筆される『蜻蛉日記』については、その書名が出てくるもの、まだ見つかっておりません。確か『雨月物語』というのは、何か、記憶があるんですけれども、『蜻蛉日記』だけはまだ確認できておりません。

それから、郁次郎の交友関係はやはりこういった書翰・葉書類で十分確認することが可能になると思います。で、郁次郎みずからも、交友関係、これは全く表題がなく私が勝手に仮表題をつ

けたんですが、「交友関係者住所録」というのを作成してしまして、それには二五七名が列記されております。どういう人物かの説明がないのもありますけども、かなり、半数以上は、どういう人物かというのが、肩書きにメモ書程度に記載してますので、そういうものの分析も重要になつてくるかと思ひます。

それからこれは、今は典籍の部にはありませんけれども、文書・記録類のほうに、文庫の目録類があります。それを、ここ(レジメ)に上げておきましたので、もし典籍と照合するだとかいったようなことがあつたら参考にしていただきたいと思ひます。リストに挙げたA、B、Cです。全部、若干時代が違いますけれども、収納されている容器ごとに書名や冊数が記載されています。ただ一冊だけは、ここに上げたEのものですね。これはいつの調査かというのがちよつと判らなくて、その手がかりになるのが、その目録の用紙に使われている罫紙、「佐州古文書謄写用紙」というのを使用していますので、これをよくよく調べれば、これが活動した、戦後ぐらいかなというのがわかりますが、ちよつと今のところいつなのかというのは判然としません。唯一これだけが、文庫の典籍を分野別に分類している目録であります。そこ(レジメ)に参考のために掲出しましたように、二五の分野別目録を作成しているということです。

あと一点だけ、郁次郎の筆跡をちよつとご覧いただきたいと思ひますが、これが卷子本の第二巻目の最初から一〇点目ぐらいにあるものです(写真11・12)。「啓上仕り候」から始まって、その次ですから、この写真になります。ここに作成者の郁次郎、これが宛名で田中稻城様となっております(リストでは「政治家・自由民権家・官僚」の中)。田中稻城つていつたら、余りにも有

名ですからお判りになりますよね。今の国立国会図書館の初代館長であります。東大で和漢文学を学んだんですけれども、東大の教員になってから、いきなり文部省の役人に呼ばれて、それで東京図書館、それが後の帝国図書館になりその初代館長、今現在の国立国会図書館なんですけれども、図書館学の道に邁進していく人になります。ですから、非常に書誌的なことにも造詣が深い知識人でありました。それで、郁次郎はこういう字を、ちょっと癖のある字をお書きになります。この書状は、「岸本弥三郎の事績をお申し聞きの砌、お示しくだされ候旗本の名前の書物につき、左の廉々お伺い申し上げ候」ということで、この一〜六箇条について問い合わせをしています。積極的に田中稻城に問い合わせをしている内容は、書物は何という書名か、著者の名前は、それと年代とかです。この質問状を見て、受け取った稻城の方では、一々返事を書くのは面倒なことだから、そのわきに直接朱書きで返事を書いて戻しているんですね。こういう形式は、勘返状といえますけれども、これは大名家の家臣同士のやりとり文書に散見されます。伺いを立てたら、表（あるいは包紙）上（天）部に何々様と宛名書、発信者は下（地）部に据えます、そして返信の場合は、上部宛名の脇に「下」、下部発信人の脇に「上」と書いて返信扱いとしたのであります。この書翰はこういった直接朱で返事をくれたものの一つであります。

##### 五 鵜飼家文書の特徴と位置付け

それでは、そろそろ持ち時間が迫ってきましたので、鵜飼家文書の特徴と位置づけを最後にま

とめて終わりにしたいと思います。

近世文書は、鵜飼家が寛政年間以降村方三役を歴任したというのは既に指摘しました。しかし、歴任はしたけれども、どうもその歴任期間が、どういう役についても短期なんです。鵜飼家の職歴でも触れましたように、数人による輪番体制が敷かれていたと思います。本文書群には、村役人のお宅には、ほとんど、必ずと言って見られるような、基本的な、いわば村役人に特有な帳簿類だとかというものは全く見られません。これは、その役についた源助たちのせいではなく、やはり輪番体制に要因があるのではないかというふうに考えております。ずっと世襲していれば、その役宅での文書の残り方というのは全然違うと思います。それが原因かなと思います。ただ、土地移動に関わる証文については、村方三役が奥書きをするものですから、直接鵜飼家に関わらなくても、先ほども言いましたように、大量に残っております。ですから、村全体で、どのぐらいの割合のものを鵜飼家文書の中に有しているのかというのは、それは推定の域を越えませんが、せんけれども、そういった土地移動にかかわる情報はある程度把握できる。なおかつ、その鵜飼家が実際に質地や金銭による譲渡での土地集積に関する証書類が大量にありますから、そういうような把握は近世文書では可能でないかなと思います。

近代については、何ととっても、郁次郎の活動に深く関わって、佐渡地域における明治一〇年代からの民権運動、ひいては国会開設前後の動向といったようなこと、また国会議員在職中については、郁次郎が関わった建議案の要求を、どういう順番でやっていったのか、あるいはそれをどう実現に向けていったのかという動向について、その具体的様相の解明ができるものと思つて

おります。さらに新潟県選出議員はもとより全国選出議員や官僚・関係者とも、さまざまな交流があります。例の七巻仕立てに仕立てられた中に、郁次郎が建議で五つぐらいの案件を重要視しておりましたけれども、その案件にかかわった人たちが、あの七巻仕立てにすくい上げられています。そういうことでも、郁次郎の思いというのが伝わってくるのではないかと思います。

あと、実を言うと、一番重要な目録編成については、「資料―2」（鶴飼家文書目録編成）として、途中ではありますが示しました。今のところサブシリーズ・レベルにとどまっています。これはまだ確定版ではございませんけれども、こういうような形で、在職あと三カ月もありませんけれども、できるだけこの作業を終えて、できれば、先ほどお示した書翰・葉書類などの処理を含めてできるだけのことやって、後輩に託していこうかなと思っております。

最後になりますが、体調が急速に衰え始めた在職最後の大きな仕事として、こうした八千点超えという史料を整理することになりましたが、じかに原本の全てを目の当たりにできたことは楽しくかつ嬉しいことであります。それは鶴飼さんが、「最後まで頑張つて整理を終えて下さい」といった激励かなというふうにも整理に望むたびに思っております。勤めてから三九回目の正月を迎えましたが、今日の報告準備に没頭せざるを得なく、在職中最後ですが最悪の正月を迎えることとなりました。今週末いい正月を迎え直したいと思えます。ご清聴ありがとうございます。

司会 山田先生、どうもありがとうございます。当初予定された点数が四千点余り、それが

▼A  
実際開いていったら八千点に倍増ということでした。この八千点という分量は、史料整理に手慣れた者でも多すぎまして、一人でこなすのはなかなか大変なことだと思えます。しかし、今日のお話を伺うと、史料の質が非常に興味深い、いろいろな利用が可能であるように思います。時間が限られて、報告では十分に伝えることができなかったところも多々あるのではないかと思います。つきましては皆さんからご質問、ご意見などをお願い致します。いかがでしょうか。

国文学研究資料館のAです。私は、山田先生と一緒にこの鶴飼文庫の史料の整理を担当した者ですので、特に質問とかいうことではなくて、少し本日のお話の感想と補足を述べさせていただきます。

そもそも鶴飼文庫の調査は、国文研の調査収集事業の対象として、国文学関係を中心とする書籍の調査収集をさせていただくということで続けてまいりまして、私は三番目の館内担当者ということになりますが、その最終段階で、鶴飼さんのほうから、文庫の史料を寄託したいというお話がありまして、私どもで改めてその全貌について調査をすることになりました。

ところが、今山田先生のほうから全体の調査結果のまとめがございましたけれども、鶴飼文庫は、国文関係の書籍資料よりも、歴史関係の文書史料を膨大に含んでいて、従来の国文研の調査の範囲から大きく逸脱したものだことが分かってきたわけです。

それで、当館のアーカイブズ部門に助けを求めまして、山田先生が文書史料の調査、寄託のための準備に加わってくださいました。そうでなければ、国文学関係の我々に、これだけの歴史文書を含む鶴飼文庫の全貌は分からないままに、形だけいただいてくるということになったかもしれません。それが改めて寄贈という、私たちにとってさらに有難いかたちになりました。しかしそのことが、山田先生のご負担を増やし、体力的にも大変なご苦労を強いることになってしまいました、申しわけなくも思っております。

そうした中で、文書史料類をここまでまとめ上げられたということに（あまり仲間褒めをしてもよくないのかもしれませんが）、今日は特別講義ということで、山田さんが館内の主役でいらつしやるので、心から敬意を表したいと思います。

今日のお話にありませんでした、文学関係を多量に含む書籍資料がどのように整理され、公開を待っているかということについて、少しだけ触れさせていただきます。

この資料の中には、既に今西館長が影印刊行された旧阿波国文庫蔵の『蜻蛉日記』のような、貴重本と言って良い典籍が数点含まれておりますけれども、それ以外は、先ほど佐渡叢書のご紹介がありました、非常に多岐にわたる書籍群でありまして、特に近世の版本等が中心で、明治にまで及び、千五百点近くございます。これをすべて搬送して、国文研の書庫に、先ほど画像でご紹介のあったあの本箱のまま、入れさせていただきますました。それらは既にラベル張り等の処理を終えまして、館外の方も関

覧することが可能ですが、さらにこれを、国文研のデータベースから公開する準備を進めております。そのサンプル数十点が、既にでき上がりまして、鶴飼さんにも見ていただきましたけれども、残りの大部分につきましては、今年の夏までには全てのデータの入力及び画像との組み合わせを終わって、公開の予定になっております。今日ご紹介いただいた歴史関係及び文学関係の資料が揃って世の中に出ていくということで、協業の成果を、ぜひとも広い範囲で利用していただくことを期待しております。

大分長くなりましたが、個人的なことを一言だけ申し上げたいと思います。鶴飼文庫での作業の間、山田さんと同じ旅館に泊まったんですけれども、旅館の大きな風呂に入ったときに、山田先生が、何を思われたか後輩である私の背中を流してくださいということが、懐かしい思い出として残っております。ご一緒できるのもうしばらくになりました。本当にいろいろ有難うございました。

司会 ありがとうございます。ほかの方でいかがでしょうか。今の新高先生からの質問というか、お話とも関わりますが、この文書史料の中に、文学関係の書物の入手とか、貸借とか、そういうような記録などは見られるのでしょうか。手紙の中で少しは出てきているような話がありましたか。

山田 貸借については余りないですね。ただ、ほとんどが古書肆からの収集が中心ですから、向こうから、新しいこういうのが出たけれどもどうだとか、あるいは鶴飼さんから



ら、こういう本がないかだとかいったようなことで、購入とか入手に関わる内容に限られております。ただ貸借ではないですが、徳富蘇峰をはじめとする閲覧履歴簿があるんですが、初期段階だけで書き継がれておりません。

▼B 司会 ありがとうございます。ほかに何か、ございませうか。お願いいたします。

▼B 国文学研究資料館Bです。どうもありがとうございます。

まず感想なんですけれども、去年新潟県立文書館で報告をさせていただいて、佐渡の関係の資料というのを確認させてもらったところ、佐渡の資料というのはそんなに多く残っていないくて、今回山田先生のお話によりますと八千点を超える資料群だということ、非常に県にとっても貴重なものなんだろうなと思いました。

その中で今回山田先生がお作りになった、資料の目録の編成を拝見していて、今回原黒村の概要に關しまして、一ページ目で詳細に記していただいておりますが、山田先生のお作りになった資料の目録編成を見ますと、土地の中に、塩畑というサブシリーズを設けていらつしやっています。今回の原黒村自身が製塩というのが盛んだったということがあったかと思うんですが、これはそもそも全体としまして、鶴飼家の持ち高がどれぐらいだったかという点と、基礎的な情報なんです、あと製塩を実際に行っていたのか、それとも塩田経営として、質地のような類いで転売なりをしていたのかという点をお聞かせいただけたらと思っております。というのは、実は佐渡の塩業の話というのは研究が余り多くなくて、歴史研究的な立場からお聞かせいただきたい

と思います。お願いします。

山田 まず、直接的に鵜飼さんは、塩田に関わっていないですよ。ですね。実は、その鵜飼さんの、先ほどあったお宅の裏に出ると、そうですね、五〇メートル行ったらもう海ですね。だからすごく景色のいい海っぺりに近いんですけれども、鵜飼家ではそれをやったという形跡はないと思います。

ただ私がここに上げたのは、要するに塩田に関わつての、村役人としての関係の史料だということです。正確にどのぐらいの点数かというのはちょっとわかりませんが、それはデータは全てとつてありますから、塩田で引けばある程度引つかかるのは可能だと思います。いいですか。

(報告以後に調べた概要補足、鵜飼源助が塩畑や道具の塩釜・水塩桶などを譲渡や質取の証文が三通あり(享保六年を初見に、宝暦一〇年、文化五年)、また文化三年には塩畑売渡証文もある。さらに明治二四年の鵜飼留守宅から郁次郎宛の葉書には、浜普請に取り掛かるので至急塩田預け人を知らせて欲しいとあり、入手した塩畑は預け人にまかせていたと思われるが、明治二七年には「塩釜屋及桶納屋風害修繕打帳」(作成は酒田屋)もあり、鵜飼家の塩田経営の実態究明は後日を期したい。因みに、地券の塩畑はいずれも住吉村に三畝二八歩(地価三円六錢六厘、持主玲吉)と一反一畝一〇歩(地価一円三三錢三厘、持主郁次郎)の二枚あり、他に、原黒村の塩畑で持主が本間甚五郎分の二枚が含まれている。「佐渡三郡(雑太・加茂・羽茂)反別調」(明治二三年)では、塩田反別一二町八反六畝二七歩である。)

▼B ありがとうございます。非常に興味深いお話をありがとうございました。

司会 ほかにいかがでしょうか。お願いします。

▼C 国文学研究資料館のCでございます。私は鶴飼文庫の調査が国文研で始まりました早い時期に、鈴木先生から担当を引き継ぎ、八年間ぐらい調査担当をさせていただきました。この文庫に携わっていたのですけれども、その後担当を高先生にお願いして、そしてまた山田先生に、こういう形で大変な仕事に携わっていただいていたのだというのを存じ上げなかったものですから、大変感動いたしております。

この資料の最後のほうの、書状のところ、古書肆の朝倉屋と大分やりとりがあるようですが、私がたまたまナポリ国立図書館ルッケージパツリ文庫の調査をした時に、やはり古書蒐集に朝倉屋が絡んでいたと思われるのですね。ここもやはり朝倉屋が蒐集に関係しているのかなと、とても興味深く思ったのですけれども。

山田 この当時からやっぱりすごいですよね。取引量というのが。

▼C ほかの人と全く同じ感じなのです。朝倉屋との関わりというのは。それとも古書蒐集全体に朝倉屋が広く関わっているとお思いですか。

山田 古書店関係では、浅倉屋との情報交換が断然トップ（約六五通）で、次が大阪の鹿田静七（松雲堂・約五五通）、次が古銭商の亀田一恕（約三〇通）となります。このほか、今は書簡と葉書を取り上げましたが、これと相当量の領収書があるんです。ほんの、こんな小さい紙片ですが、本代の領収書というのが意外と、値も張るから意識的

に保存したかもしれませんけれども、鵜飼さんのお宅は、本当、異常なぐらい保存する意識があつたようで。牛乳や新聞代金の毎月の小さな領収書、全て揃っているんですよ。やっぱり代々そういうようなものを大事にするっていうんですかね。だからあの簀の子も、その一端ではないかと思うんですけれども。

▼C ありがとうございます。

司会 領収書が大量に伝存しているとの話がありました。鵜飼郁次郎関係では、未整理の書翰も多かったのでしょうか。配布資料の中に交信関係にあつた者の素性・経歴をまとめた二一ページに及ぶ資料があり、非常に多くの人々と交信あつたことが確認できますが、これらは書翰整理のための基本情報として一点一点の作業を通じて先生が作り上げたものでしょうか。また、点数が増えたのは未整理の書翰類が多く、今回それらをひもといていく中で増えたということでしょうか。

山田 そうですね、特にNは葉書類ですが、手書き目録では約二、四〇〇点を採録してありましたが、新たに約三三〇点増えたことになりました。例の表(資料3)になっていたのでおわかりの通り、倍以上増えたのは、B・D・H・I・J・L・M・O・Q・R・Sの括りですので、二〇括りの内の約半分の一一括りが増以上増えたこと、それとU以降の六括りの約九三〇点は新規に採録したものです。

司会 公文書的なものではわからないような、たとえば家族の情報、文化的な交流とか、さまざまなものが、そういう中にひもとかれていくんだろうと思います。そういう意味で

も今回は大変重要な作業であったと思いますが、文字も大変読みにくいものが多いですね。

山田 はい、実に難読も多く、字を見ただけでまたこの人かと頭を抱えることが多かったです。

司会 そういったところをやってくたさったということでも非常にありがたい。今までこの部分は手付かずだったわけですね、新潟県などでも十分に調査できなかったのでしょうか。

山田 そうですね、時間的な制約もあったと思います。

司会 ここら辺にかかつての質問はございませんか。お願いいたします。

▼D 総合研究大学院大学院生のDと申します。資料4の「鵜飼郁次郎宛書翰・葉書類発行者リスト」の、特に報道、出版社、書店のところを大変興味を持ちながら拝読しておりましたので、手を挙げさせていただきました。

というのは、先ほど徳富蘇峰のお話が少し出ていましたけれども、蘇峰が起こした民友社が刊行した出版物には、多くの近代の作家たちが作品を掲載しています。例えば国木田独歩などもそこで活躍することで名を挙げていきました。徳富蘇峰が自ら訪ねていくような人物であった鵜飼郁次郎宛書翰の一つ一つは、これまで近代の出版史で明らかになっていなかった部分をも照らし出す価値あるものと期待をもって見せていただいております。近代の出版史に関する文献は多くありますが、社史が残って

いる出版社ばかりではありません。書翰や葉書であるという性格上、そのときどこに会社があつて、どういう人たちが動いていたのかというのが見えてくるということも、当時の歴史を明らかにしていく大きな力になるのではないかと思ひながら読ませていただきました。感想めいたことで申しわけありません。

司会 山田先生のほうから何かございますか。

山田 ありがとうございます。消印も重要な情報として可能な限り採録したのは無駄ではなかつたと改めて感じております。

司会 時間が限られておりますが、ほかにいかがでしょうか。鶴飼さんのほうから何かお話しただくことがありましたらお願いしたいのですが、いかがでしょうか。

▼E 今話にありました、あれから何代目になるか知りませんが、鶴飼でございます。

随分長い間この国文研とおつき合ひいただいて、一番最初は、鈴木先生ですか、私が夏ちょうど田舎に帰つているときに飛び込みでお見えになつて、何か本があるみたいですねというお話で、そこからスタートして一〇何年(一九九一年)、長い間本場にありますがとうございました。特に山田先生と関係ができてから、山田先生じゃないとできないというような、何か、感を深めておりまして、本当に埃をかぶつて腐れかかつたような紙を読み解いていただいて、ここまで来ていただいて、本場にありがとうございます。ました。

また典籍のほうも、寄贈させていただいて、我々は本当によかつたなと。特に、佐

渡の地元とか、あるいは新潟とか、いろいろお話はあつたんですけれども、やはり従来のおつき合い、鈴木さんから始まって、山下さん、それから大高先生とお世話いただいた流れに加えて、やはりこの長いおつき合いの中での人間関係といえますか、大変ありがたく思っております。

僕らにとっては、何もわからない書物も沢山たくさんあり、ほとんどがそうでありますけれども、こうやってまたこの国文学研究資料館でお役に立てればと思っております。ありがとうございます。

司会

ありがとうございます。残念ですが予定の時間が来てしまったようでございます。今日の山田先生のご報告タイトルには、最後の文書整理とありましたが、これは職場の仕事ではということでしょう。これからいろいろな整理に関わっていただき、後進の指導をお願い致します。「体力が」というお話もありましたが、元気でどんどん活躍していただければと思います。本日は、どうもありがとうございました。

(了)

2014年度第2回特別講義  
20150107

最後の文書整理と目録編成  
—佐渡国加茂郡原黒村(現・佐渡市)鶺鴒家文書—

山田 哲好

1. 村の概要と地名の変遷
2. 鶺鴒家の概要
3. 鶺鴒家文書の調査歴と当館収蔵経緯
4. 鶺鴒家文書の整理と目録編成方針
5. 鶺鴒家文書の特徴と位置付け

## 1. 村の概要と地名の変遷

【加茂郡原黒村の概要】(江戸～明治22年)

- ・享保4年城腰村の原黒組が原黒村として独立村の扱いを請けて成立
- ・村名は焼畑(佐渡では焼蒔)農法による開墾に因むとされている
- ・幕府領(佐渡奉行支配下)
- ・宝暦年間の村高435石余、田9町余、畑23町余、名請人61
- ・天保12年の村高435石余、田9町余、畑23町余、家数65、人数343
- ・寛文2年に能登の船頭長兵衛が揚浜式製塩を伝えてから製塩発展  
元禄7年の塩畑は1町7反余、名請人15  
文政13年製塩高は1,224石、嘉永元年製塩予定高は3,120石、内1,875石は売却済  
∴大規模

【地名の変遷】

原黒村→明治22年明治村→明治34年河崎村→昭和29年両津市  
→平成16年3月1日佐渡市(佐渡全市町村：1市7町2村)



## 2. 鶴飼家の概要 ①

- ・鶴飼家の系譜・過去帳類あるも最終確定版にいたってない(1代ずれあり)
- ・2011年現ご当主重行氏作成の最新版では、重行氏が11代、以下これに準拠
- ・近世では「源助」、屋号「酒田屋」

【村役人(地方三役)ほか公職】

名主：天保2年、天保3年、天保12年、嘉永5年

組頭：寛政2年、文化14年、文政10年、文政14年、元治元年、慶応3年

百姓代：寛政11年、文化5年、文化10年、文化13年、文化15年

質屋組合年行事(天保3・5年)

両替商：天保11年両替職御免願あり

【家業】

地主経営：近世中期(享保6年以降)より、近隣諸村から質地として土地集積  
(質地証文多数)

酒造業：湯上村上組酒造家十助より酒造株1株、元米2石6斗8升、酒造具共銀21匁5厘7毛にて買受開業、酒造倉庫(西之倉)1棟建築、酒田屋と号す

## 2. 鶴飼家の概要 ②

- ・第8代玲吉が明治16年1月享年21才で死去、同年9月雑太郎竹田村(真野村)に生まれた羽生郁次郎が後夫として入籍

【資料-1】鶴飼郁次郎年譜(鶴飼重行氏作成) 参考：肖像写真01

- ・本文書群の7割が、郁次郎関係文書記録である
- ・明治30年代から膨大な文書記録を自ら整理し、書翰や郵便葉書も残存量からして明らかに意図的に全て遺そうとしたと推定できる
- ・近世・近代通して日常大量に作成される金品送受に関わる頼も非常に多い

### 3. 鶴飼家文書(含:典籍)の調査歴と当館収蔵経緯 ①

【閲覧調査】(敬称略)

- ・昭和5年9月27日 徳宮蘇峰令夫人探訪、記念写真あり
- ・昭和45年4月7日 和歌森太郎、大江志乃夫探訪
- ・\*\*\* 東京学芸大学館中探訪
- ・平成3-8年 慶応大学斯道文庫調査
- ・平成9年9月12-13日 国文研典籍調査(鈴木)
- ・平成10年3月14-17日 国文研典籍調査(鈴木・山下・橋中)
- ・ 12月5-7日 国文研典籍調査(橋中・湯浅)
- ・平成11年10月1-3日 国文研典籍調査(橋中・広部)
- ・平成12年9月21-23日 国文研典籍調査(橋中・広部)
- ・平成13年6月 新潟県健新史研究会文書所在再確認
- ・ 7月 両津市教委の要請で新潟県立文書館予備調査、ダンボールに収納
- ・ 9月 新潟県立文書館出張調査実施(新穂村)
- ・ 9月18-20日 国文研典籍調査(橋中・広部)
- ・平成14年8月10-12日 新潟県立文書館調査(5名、両津市郷土博物館2名)、悉皆的な目録化を目的、鍵まりごと(収納容器)A~Tの記号付号、都次郎・重雄宛葉書や書状多く、詳細目録一部断念、概数のみ、手書き目録作成、約4,300点
- ・平成15年3月8-10日 国文研典籍調査(橋中・広部・鈴木孝庸)
- ・ 9月13-15日 国文研典籍調査(橋中・広部)
- ・平成18年10月20-23日 国文研典籍調査(橋中・広部・鈴木孝庸)

### 3. 鶴飼家文書(含:典籍)の調査歴と当館収蔵経緯 ②

- ・平成22年8月3-5日 国文研典籍・文書調査(大高・鶴中・中村・山田) 新規約130点目録化、デジタル撮影
- ・ 12月5-7日 国文研典籍・文書調査(大高・青田・山田) 新規13点目録化、デジタル撮影
- ・平成23年8月1-3日 国文研へ搬出立会(今西・大高・和田・山田)  
6/2美術梱包者で搬出、6/3国文研搬入、8月中消毒処理、10月から典籍と文書とに分けて最終確認と目録作成作業開始
- ・平成23年11月14日 鶴飼重行氏感謝状贈呈式及び座談会

\* 文書の当館受贈については、現地保存主義定着していることに鑑みて、佐渡市教育委員会と新潟県立文書館に経緯を事前に連絡済み

#### 4. 鶴飼家文書の整理と目録編成方針

- ・整理：平成14年8月の新潟県立文書館調査時作成手書き目録に準拠し、まず目録と原本との照合、一括処理(例：他\*点、他多数)は枝番や読み番号を付与して対応、当初仕分けたA～丁を随機する
- ・目録編成：目録編成とは、個々の文書を文書群全体の中に位置付けて、その存在の意味を理解することである。そのためには文書が含まれる文書群の階層構造(体系的秩序)を、発身体である組織体や個人の機能や活動の実態を理解して編成すること、これがアーカイブズ学の視点に立脚した文書の科学的認識でもある。従って鶴飼家の場合、鶴飼家の職歴や役職、活動歴などの把握が不可欠で、階層構造は、フォンド・サブフォンド・シリーズ・サブシリーズ・アイテムとして捉える。

##### 【資料-2】 鶴飼家文書目録編成

- ・目録記述：単にアイテムレベルの情報だけでなく、フォンド・レベルを含めた各レベルの纏まりごとに情報を提供する必要がある。本文書群のアイテム・レベルの記述では、郵便葉書が約3,000点あり、月日しか情報がないのが大半だが、消印が重要な情報であるので可能な限り採録した(その場合、消印から採用したという情報も補記)
- ・整理の現状：総件数8,043、当初約4,500点と予想、書翰や葉書も含めてその内容を補記
- ・大量の書翰や葉書の処理：同一人物や組織から多い場合は50通超えている、差出人別で編年とし、宛名で区分する、但し、数名連名の処理に苦慮

##### 【資料-3】 収納容器別一覧表

##### 【資料-4】 鶴飼郁次郎宛書翰・葉書発信者リスト

#### トピック紹介 ①

##### ① 鶴飼文庫の維持・保存管理

- ・大正15年4月延焼火災で土蔵3棟を除き灰燼、5月に土蔵3棟を1箇所に移転、永久的建造物に改築、12月竣工。現在まで使用、1階文書・2階典籍 一写真2～9
- ・明治41年『鶴飼家蔵書調』と虫干し、以降大正3年まで毎年3・4日、4・5日で継続
- ・圓山溥北死去後、圓山家から郁次郎宛の書状(明治27年)には、「…且又頃日相用之鳩ニハ貴兄有志諸士ト御帰讓之上畫鑑館設立ノ美挙有之由、実ニ吾佐島ノ名譽ト奉存候…」とあり注目できる

##### ② 文庫の蔵書収集先

- ・古書肆の数の多さ、東京だけではなく、名古屋、京都、大阪の業者とも交流
- ・大日本史料・古文書、史学雑誌、考古学雑誌も購入
- ・古銭商だけでなく、『両銭譜』の編者(馬嶋杏雨)とも交流
- ・他に購入先からの預取書まで大量
- ・自らも積極的にアプローチして情報収集している 写真11・12
- ・本箱入巻子7巻仕立は、明治31年新潟市の表具師中沢壯太郎へ発注、仕立代金2円50銭の請求がある、当時(明治30年頃)の小学校教員初任給は8～9円程度、1円は現在の20万円相当、50万円程度となるので巻とは考えられないのでこの7巻に相当、仕上がりは全くの素人、本紙文字部分断裁散見、記号Wで収録は160点余、郁次郎が建議案件として関わった関係者を候補としている 写真10
- ・但し、鶴飼日記の記事は確認できていない

### トピック紹介 ②

#### ③郁次郎の交友

- ・議員同士の集会、結社との関わり、建議案に対する応酬などから実態把握可能
- ・定例の挨拶(かなり多い)であっても交友関係者となる
- ・自ら「(交友関係者住所録)」を作成(257名)、その分析も重要

#### ④蔵書目録類

##### A. 「書籍記」(横長帳、1冊、裏表紙「書籍録」)

明治7年旧7月20日ヨ23日迄虫仏、大正3年迄年1回点検済、調方石川寿作・石川彦左衛門・小池龍蔵

##### B. 「鶴飼家蔵書調」(縦帳、1冊、「文貞堂」青色罫紙使用)

明治41年旧7月20日ヨ23日迄虫仏、大正3年迄年1回点検済、調方石川寿作・石川彦左衛門・小池龍蔵

内容: 桐老号〜廿号、第一号ノ函〜五十函、天・地・人、桧五十函、タンス入り(考古書類)、桐箱第八号(以上、容器別目録)、書画の部

天部に容器番号・種別、移動の記事、地部余白に青ペン点・朱点、鉛筆点・青ペン

○・鉛筆点のチェックあり

##### C. 「動産物調帳」(横長帳、1冊)

明治41年8月25日 鶴飼 名士書翰目録 あり、

内容: 財産調(家屋・土蔵など45件)、中之土蔵(書籍、万国地図、座布団など、書

画・書翰含む、104件)、立会人: 佐藤市之丞・青木永太郎・長嶋菊江・小池龍蔵

### トピック紹介 ③

#### D. 「鶴飼文庫蔵書目録」(縦帳、1冊、刊本)

内題: 「故鶴飼郁次郎翁遺本 嗣子鶴飼重雄」、大正・昭和14年迄の印刷

内容: 収納容器別、桐箱老号〜貳拾号、桐箱元・亨・貞、桐ノ木天・地・人、桐箱乾・坤、古箱、桐小箱、古箱、桐箱引出付、佐渡叢書老号〜五号、洋綴書籍、考古書類筆筒入、桧第老号〜第五十号、石川彦左衛門氏寄贈・其一・其二、遺愛品: 書画之部、古泉、土器、石器、石鏃

#### E. 「蔵書仮目録」(縦帳、1冊、「佐州古文書謄写用紙」罫紙使用、箱入(箱書: 鶴飼竹田師友書牘!))

内容: 25の分野別目録: 神事、国史、雑史、度量衡貨、佐渡書類、歴史・卜筮・天文・時令、系譜・伝記、律令・制度・政治、兵書・武器、書目、物語、草子、日記・紀行、歌連俳、地理・地図、医書: 本草・物産、往来類、隨筆、怪談・滑稽、志那書、仏書、教訓、文墨金石、字書、詩文、類書

収納されている箱番号が朱書、加除・訂正多し

#### F. 「古暦目録」(縦帳、1冊、青色罫紙使用)

内容: 正保5年〜明治25年迄、51冊、年代・冊数・版元

## 6. 鶴飼家文書の特徴と位置付け

- ・近世文書は、鶴飼家が寛政年間以降、三役を歴任しているが、就任期間が短く、頻繁に替わっていることから、数人による輪番体制と思われる。本文書群には、村役家で通常見られる基本的帳簿類などは全く存在しなく、それは輪番体制に起因していると推測できる。ただ土地移動に関わる証書類には村三役が奥書を据えるので、それらの証文は存在するし、鶴飼家の土地集積の実態把握も可能である。
- ・近代文書は、郁次郎の活動に深く関わって、佐渡地域における明治10年代からの民権運動と国会開設前後の動向、また国会議員在職中については郁次郎が関わった建議案の実現に向けて、具体的動向が解明できる。さらに新潟県選出議員はもとより全国選出議員や官僚・関係者との様々な交流の実態も解明できることから、史料的位置づけは否定できない。

[資料-4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

N-1940.N-2076.N-2192.N-2337.V-1-27

羽生英三（郁次郎兄、次男）N-14（敦賀港）.N-46（竹田村）.N-205（佐渡夷）.N-253（佐渡新町）.N-311（青野屋）.N-384（新潟）.N-467（竹田村）.N-499.N-506.N-528.N-829（長野扇や宿）.N-831（サワねニテ）.N-879（元竹田）.N-1076.N-1195（柏崎）.N-1253（佐渡新町）.N-1263（真野）.N-1483（佐渡新町）.N-1675.N-1679（奈良ヨリ）.N-1704（佐渡新町）.N-1873（真野）.N-1957（竹田）.N-1960（竹元）.N-2238（河原田）

羽生金吾（麻布）N-302.N-1086

羽生甚右衛門（佐渡中興）N-67.N-856.N-980.N-1699.N-1909.N-2235.N-2434（麴町）

羽生鉄次郎（北海道岩内郡）N-2413

羽生徳三郎（多度津にて）N-286

羽生甚五郎 N-1027

小池龍蔵（旧姓北見、明治31年夷町の小池キチの養子となるが、その後縁があつて鶴飼家の管理などを担い、特に郁次郎没後の活躍は特筆に値し、郁次郎の功績をまとめ上げるなどに奔走、鶴飼家からも信頼を得ることとなる）N-920

- 羽田清次（『佐渡遊覧案内』（1910）『両津町誌稿』などの著者）N-283.N-435.N-520.  
N-640.N-1301.N-1436.N-1636.N-1662.N-1737.N-1802.N-1814.N-1941.N-1946.N-2141.  
N-2435.U-3-8
- 八田三喜（明治6年-昭和37年、日本の教育者、明治31年東大哲学科卒業、同年より新  
潟県佐渡中学校長に着任、国家と社会が共に進歩してゆく必要があるとする社会共  
棲論を説き、北一輝の国家社会主義思想形成に影響を与えた一人だとされている）  
N-994.N-2044.N-2156
- 原田廣作（『佐渡四民風俗』1929、出版者）N-898
- 保仏万人講事務所（平泉村）N-1548
- 本間芳太郎（医師、新穂）N-999.N-1067（佐倉第2聯隊第3大隊第12中隊第40養班）  
N-1920（東京歩兵第1聯隊医務室）.N-1962（新穂）.N-2261（千葉吾妻町）.N-2287  
（新穂）.N-2316（日本橋南茅場町4番地入沢診療処）.N-2327（新穂）
- 本間萬吉（薬種商、両替商を始め、人形屋万吉、のちに穂波屋万吉と改めて島内全域  
に手広く事業を展開・新穂）N-343.N-510.N-1665.N-2087.N-2415
- 三浦常山（天保7年-明治36年、明治時代の陶業家、天保7年相川生、名主、維新後洋  
式化にともなう佐渡金山離職者の救済のため製陶業をおこす、無名異焼を改良し、  
明治9年朱泥の堅牢な陶器の焼成に成功、常山焼と称し、4代まで続く、明治36年  
10月没、68歳、本名は小平治）N-2396.N-2440.P-83
- 深山助五郎（ミヤマ、明治24年辛卯俱樂部設立者のひとり、金沢村）N-511N-689.  
N-1739.N-1806
- 守屋泰（新穂高等小学校）N-375.N-1020.N-1725.N-2005
- 諸橋浅三郎（『新撰新潟縣小学地誌』（明治36年）精華堂藏版の著者）P-34（芝）
- 矢田求（『佐渡方言俗語考』著者）P-5
- 山本半蔵（佐渡郷土史家）N-1933
- 吉田愛信（佐渡郡長）N-1389.N-2394

## 【外 国】

陸鍾允（韓国外部交渉局長）N-108

## 【鶴飼家関係】

- 留守宅 E-275.N-1273.N-1607.N-1608.N-1936.N-2267.N-2438
- 鶴飼スエ（8代玲吉兄弟、4女、本郷）N-1433.N-1901（東京）
- 鶴飼重雄（9代）N-110（直江津）.N-481.N-630.N-743（新潟）.N-902（神田区猿楽  
町）.N-1124（仙台）.N-1149.N-1472（仙台）.N-1698.N-1709.N-1723（後山）.N-1724  
（仙台）.N-1729.N-2072.N-2093.N-2094.N-2103（牛込）.N-2127（仙台）.N-2129.N-2225.  
N-2226.N-2328.N-2384.N-2388.N-2389.N-2393
- 青野半五郎（廻船、酒造、地主、沢根町、五代目が亡くなった後、未亡人（鶴飼郁  
次郎の姉妹）は5代目の弟と結ばれ弟が6代目半五郎となる）N44.N-632.N-1139.

[資料 - 4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

- (佐賀県尋常中学校) .N-1633 (栃木県中学校) .N-2067 (佐賀県尋常中学校) .N-2134.  
N-2306 (熊本県師範学校) .U-7-1-12.U-7-1-14.U-7-1-15
- 加藤瑞軒 (医師、中興) p-73
- 茅原鉄蔵 (嘉永2年大和田生、農学を修め郡農会農業委員など、郷土史家) N-143.  
N-1002
- 川上賢吉 (明治33年に設立された佐渡錫同業組合 (のち佐渡郡水産会) の組合長、同氏が発見した屏風の下張り文書 (相川町郷土博物館寄託) は昭和47年に国文研史料館がマイクロフィルムで収集済み) D-6-19.D-6-27.D-271-7.D-271-8.N-169.N-363.N-804.  
N-839.N-842.N-1090.N-1296.N-2075.N-2246.U-3-9.U-7-1-35.U-7-1-36
- 金刺操 (佐渡有志大懇親会文書往復委員・河原田町) D-4-7.N-237.N-850
- 北見喜字作 (「平泉村村是調査書」) N-1221.V-1-75.V-1-76
- 小池有恒 (少時砲術槍法水練を学び奉行所雇となる、安政4年江戸に出て柔術、整骨科を修め明治3年道場を横浜に開き、整骨治療にある、相川出) N-1408
- 高力衛門 (佐渡相川郡役所) N-1052
- 児玉健蔵 (在京学友懇親会幹事、河原田) N-524.N-637 (本郷森川町ニテ) .N-1489 (在本郷) .N-1626 (五十里町) .N-2208 (在本郷)
- 古玉清吾 (明治43年内浦漁業組合長、坊ヶ崎) N-860
- 児玉茂右衛門 (竹田小田氏の2男五十里町児玉氏を嗣ぐ、大区長、3郡併合会議長県会議員) .D-6-37.D-6-42.D-6-44.N-268.N-771.N-958.N-1304.N-1360
- 後藤吾市 (在京学友懇親会幹事、河原田) N-524
- 近藤應作 (村会議員、農会総代、産業組合理事、河崎村) .N-611
- 小林忠次 (雑太郎尋常科金沢小学校) N-2269
- 佐渡旧在京学友懇親会幹事 N-620
- 佐渡郡所得税調査委員会 O-1-33
- 佐渡誓水会 N-153
- 佐渡牧畜会社 (新保) N-2409
- 私立小原田病院 (河原田) N-2376
- 志和舜雅 (豊田村大光寺中真言宗中学林寄寓) N-1303.N-2109 (出雲崎)
- 須藤周恵 (医師) V-1-76
- 高橋磯次郎 (初代金沢村長) N-358
- 玉置清磨 (武井の人、漢籍を円山溟北に和歌を鈴木重嶺に学ぶ、歌人) N-390.T-3-1-3-1.  
T-3-1-3-7
- 永井晋 (県立佐渡女子高等学校初代校長、明治19年に羽田清次らと相川町の折柴小学校に集まり「有志佐渡教育会」を組織) N-1769.N-2126.V-1-77
- 中山新道開墾事務所 (相川) N-1359
- 中山徳太郎 (医師をしながら民間伝承の会佐渡支部に属し、青木重孝と共に『佐渡年中行事』(昭和13)刊行) N-281.N-1606
- 新潟県雑太加茂羽茂郡役所 D-4-13-3.V-5-4-12



- 中川直賢（越後糸魚川と信州松本を結ぶ120kmの生活の道を、塩などの生活物資を運び往来した歩荷（ボッカ）と呼ばれる背負運搬人と牛方がいた、明治時代中川直賢は、松本方面への販路を拡大することで、郡民の貧しさを救おうと、新松本街道（現在の国道148号、明治25年開通）の測量を行う）N-1038.N-1457
- 長濱省作（越佐汽船株主、新潟市議会議長）N-441.N-1969.N-2280
- 中邨勇三郎（明治35年新潟市医師会成立、幹事）N-1886
- 花井平蔵（中蒲原郡村松高等小学校）N-1613
- 原宏平（越後新発田の人、八田知紀門、新発田町長、大正13年没、87才）U-7-1-45.W-4-9.  
W-4-10.W-4-12
- 樋口伊策（北魚沼郡城川吉谷山辺桜町第2回養老会記事「養老会記事」出版）N-24
- 吉川庄蔵（長岡勸農場長）P-51
- 横田孫平（明治・大正時代、一つの建物の中に各種商店が連合して商品を陳列し正札販売した一種のマーケット「勸商場」（新潟市）の発起人のひとり）N-765
- 和田久四郎（写真師、新潟市）N-1464

## 【佐渡関係】

- 青木長三郎（村会議員、学務委員、農会長、薬工品函館支店、松ヶ崎村）N-1208（函館）
- 秋田藤十郎（明治18年越佐汽船会社設立したひとり、相川町長）N-410.N-1099.N-1378.  
N-1824.N-2299.N-2360
- 浅香周次郎（佐渡毎日新聞創刊者のひとり）N-390.N-1831
- 嵐城松蔵（第8回衆議院選挙で佐渡政友会は山本佛二郎を推薦、選挙事務所の真野支部を担当）N-305
- 伊藤圓蔵（越佐汽船株主）N-957
- 岩木擴（岩木文庫を遺した史書編纂の鬼才、新穂）N-400.N-611.N-974.N-1031.N-1152.  
N-1189.N-1335.N-1388.N-1514.N-1700.N-2021.N-2297.N-2363.U-7-1-31~34.V-1-25
- 植田五郎八（三保造船所カ）N-363
- 臼木兼蔵（明治44年真野村収入役、大正3年助役、大正6年村長）N-1279
- 越佐同興会理事長（新潟市）N-1579
- 遠藤傳四郎（佐渡有志大懇親会文書往復委員・河原田町）N-237
- 大柴嘉十郎（大柴眼療院、歌代村）N-2195
- 角坂二吉（河崎村長）N-673
- 角坂洋吉（東京で医学修得、帰郷して開業、学校医や河崎村長）N-2060.N-2174
- 葛西周禎（医師・儒者、羽茂村）W-2-11.W-7-18.W-7-19
- 柏倉一徳（佐渡出身、東京高等師範学校卒業、熊本中学に勤務、佐渡の教育界で活躍、森知機は弟）N-236（宮城県尋常中学校）.N-324（栃木県尋常師範校）.N-649.  
N-781（佐賀県尋常中学校）.N-1006.N-1069（熊本師範学校）.N-1118（新潟学校町）.N-1293（相川）.N-1312（佐賀県尋常中学校）.N-1317（栃木県中学校）.N-1600

[資料 - 4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

大本山総持寺東京出張所 N-58.N-2227

中尊寺事務所 (平泉) N-1935

土山澤映 (浄土真宗本願寺派僧侶) W-46~8

豊川閣 (妙巖寺) 役寮 (豊川稲荷、愛知県) N-937

中山理賢 (仏教法・浅草) N-296

長原心恭 (亀ノ脊村如意輪寺住職) N-913

仏教会 (長岡) N-1242

星見天海 (幕末から明治の曹洞宗僧侶) W-3-14

細川寂雲 (京都興徳寺カ) N-935

本願寺事務所 (京都) N-24

本光寺 (沢根村) N-484.N-485.N-532.N-692.N-855.N-1010.N-1306.N-1424.N-1720.N-1832.  
N-1938

本荘了寛 (弘化4年-大正9年、明治-大正時代の僧、弘化4年生、佐渡相川の真宗大谷派光楽寺住職の長男、明治元年得勝寺住職、8年東京で島地黙雷に師事、帰郷後小学校の教師、20年佐渡における初の月刊誌「北溟雜誌」を発行、社会事業にも尽くす、大正9年3月7日死去、74歳、本姓は笠野、号は思水、著作に「佐渡水難実記」、日記は「竹窓日記」) A-179 (佐渡中興) .N-251.N-336.N-337.N-723 (金沢ニテカ) .N-747 (佐渡中興) .N-848 (金沢村) .N-1281 (佐渡中興) .N-1354.N-1445.N-1624.  
N-1670.N-1869.N-2030.N-2419.N-2441.V-1-24.

三日市大夫次郎事務所 (御師、伊勢山田) N-1347.N-2167.N-2263

若林秀直 (吉岡の和歌人、曼荼羅寺住職) N-233 (日本橋区から) .N-745 (沢根町)

若松智範 (善照寺、南葛飾郡松江村) N-654

【新潟県内関係】

荒川重勳 (西伯利亚移民社・新潟市) N-198

太田培稼 (中魚沼郡長) N-73

荻野左門 (1902年11月4日-1904年2月20日まで新潟市長) P-127

海津民八 (明治30年郡会議員) N-1756

片桐賢三 (『改正郡治要領』明治16の出版社、『杏所印譜』編者カ、新潟市) N-369.  
N-1418.N-1451.N-1619.N-1810

工藤彦美 (新潟市医師組合同会幹事) N-1610

雑太加茂羽茂郡役所 N-838

田邊久蔵 (第4回衆議院議員選挙立候補者) N-1047.N-1509.N-2180

田村寛一郎 (弘化2年-大正2年、南魚沼郡中村生、幕末京都・江戸へ出て国文学・漢文学・剣道を学ぶ、明治18年県会議員、明治20年7月1日みずから起草した「私草大日本帝国憲法案」を各地の有志に配布、明治36年県会議員退任後、明治44年から塩沢町町長) N-808

土田橋十郎 (西蒲原郡小高村長) N-784

N-2368.N-2392

有斐閣（出版社・神田）N-31 輿論社（出版社・神田、「近世泰西通覽」）N-126

有隣堂（南伝馬町）N-352.N-829.N-1357.N-1554.N-1556

鷺田信詮（古銭志出版、神田）N-885.N-905.N-1515.N-1843.N-1848

## 【私塾・学校】

大八洲学校（オオヤシマ、本郷）N-639.N-664.N-863.N-1498

私塾・静岡掛川農学社 N-36

玉置清麿（学古塾（円山溟北主催）同窓会発起人）P-122

圓山溟北（文政元年-明治25年、幕末-明治時代の儒者、養父円山学古に学び、江戸の亀田綾瀬門に入る、天保11年郷里の佐渡に帰り学古塾を開き、のち奉行所の修教館教授となる、明治25年5月31日死去、75歳、本姓は小池、名は葆、字は子光、通称は三平、別号に与古為徒齋、赤川隠士など、著作に「大学夷考」など）D-4-1-1~6.D-4-1-8.D-4-1-9.D-4-24.Z-2-7~11

美濃部禎（葛西周禎と円山溟北の学古塾で同門、竹馬の友であった美濃部禎は明治8年度津神社の宮司として赴任、美濃部塾を開く）P-7

## 【寺院・僧侶・仏教家・神社】

阿仏房（妙宣寺、雑太新町）N-1229

石川素童（天保12年-大正9年、幕末-大正時代の僧、天保12年12月1日生、曹洞宗、東京豪徳寺、神奈川最乗寺などの住職をへて明治38年能登総持寺貫主、39年曹洞宗管長、31年に焼失した総持寺を44年横浜市鶴見に移転再建、大正9年11月16日没、80歳、尾張出身、本姓は道家、号は牧牛、諡号は大円玄致禅師）W-4-1~5

宇野黙音（覚寺住職、岐阜市）N-995

遠藤順丈（竹田円隆寺）N-2428

遠藤日運（妙宣寺39世カ、現円静寺、真野竹田）N-1087.N-1862（芝）円福寺（小松川）N-1611

大谷派本山寺務所（京都）N-261金山良照（勝興寺、富山県射水郡古国府）N-1331.N-1344.N-2260.Q-90-2

金氏法麟（小木照覚寺、富山県上新川郡字上石田教蓮寺ニテ）N-1058

鞍立長健（明持坊住職、畑野宮浦）V-1-38

豪徳寺（世田谷）N-2103

三条教務所（真宗大谷派三条別院）N-1330.N-1696.N-2331.N-2395.N-2-3.V-1-34

島地黙雷（天保9年2月15日-明治44年2月3日、明治時代に活躍した浄土真宗本願寺派の僧、周防国和田で専照寺の四男として生まれ、雨田、北峰、六々道人などと号す、西本願寺の執行長）P-74.W-3-15.W-3-17

勝興寺執事（富山県射水郡古国府）N-1331.N-2153

大願寺（金丸）N-2228

[資料-4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

- 図書出版社 (大阪) N-97  
東京製図会社 (京橋) N-2074  
東京堂 (書林、神田) N-1931  
東京同益出版社 (麹町) N-1958  
東京統計協会 (出版社、日本統計協会は130年を超える長い歴史を持ち、その前身は明治9年に設立された統計学社と明治11年に設立された東京統計協会、両団体の設立には、杉亨二など我が国統計の先駆者が関わる、京橋) N-294.N-764.N-1469.N-2239.N-2254  
東京図書館 N-488  
東京図書出版合資会社 N-163  
東洋社 (図書雑誌標本発売元、神田) N-853.N-1927  
東陽堂支店 (神田) N-1721  
中外商業新報商況社 (日本橋) N-1740.N-2144  
中山萬平 (書肆・佐渡川原田) N-81.N-825.N-1837.N-2097  
二十世紀雜誌社 (新潟市) N-1400  
日芳律書院 (京橋) N-931  
廃娼雜誌社 (出版社・築地) N-130  
芳賀大三郎 (古書店・芳賀書店・神田、「史学雑誌」代金請求) N-271.N-1193.N-1437.V-1-49.V-1-49  
芳賀大之助 (古書店・芳賀書店・神田) N-1026  
博文館 (日本橋) N-1550.N-1609.N-2120.O-28  
博聞社 (銀座) N-1134.N-1648.N-2285.N-1374  
樋口源吉 (号攤天堂、書籍活版業者、三条) N-2284  
樋口小左衛門店 (越後三条猶興社) N-494.N-2096  
富山房 (神田) N-1722.N-1973.N-2071.N-2112.N-2157.N-2230.V-1-54  
筆一本舎 (大阪市) N-2105  
鳳文館 (京橋) N-1789  
北溟社 (佐渡) N-1616  
松本五三九 (書店・佐渡大野村) N-33  
円山聿 (出版社・相川、「溟北文稿」など) N-273.N-470.N-819.N-929.N-998.N-2349.N-2-61-14  
村上書店 (新潟市) N-1477  
明教社 (出版社・東京30間堀) N-248.N-1268.N-1676.N-1803.N-2408  
明賢舎 (出版社カ、神田) N-986  
明治館 (出版社・神田) N-29  
明法堂 (書肆・神田) N-124.N-1426.N-1712.N-2402.N-2443  
八尾商店 (銀座) N-415.N-417  
吉川半七 (書肆・京橋) N-138.N-710.N-711.N-714~717.N-1202.N-1212.N-1552.N-2211.

- N-1375 (下谷) .N-1376.N-1516~1520.N-1522.N-1526.N-1527.N-1529.N-1530.N-1535~1539.N-2232 (本郷) .N-2255.N-2341.N-2343.N-2344.N-2355.N-2356.P-66 (駒込) .  
 P-67 (芝) .P-68 (下谷) .V-1-74
- 其中堂書店 (仏書林、名古屋) N-1836  
 京極三郎 (三京堂、京橋) N-1178  
 経済会本部 (大日本紳士鑑編纂、麻布) N-493  
 現行法規綴編輯所 (京橋) N204  
 皇典講究所印刷部 (麴町) N-628.N-760  
 衡文館 (日本橋) N-1823  
 光融館 (出版社、神田) N-602  
 光?社 (出版社・神田) N-243  
 古事類苑編纂事務所 (小石川) N-1023  
 近藤活版所 (続史集覧、麴町) N-924  
 金港堂書籍株式会社 (日本橋) N-944.N2160  
 近藤圭造 (天保3年・明治34年、明治期の漢学者、代言事務所、近藤活版所を興し古典の収集 復刻を企て、「史籍収覧」を完成) N-329.N-491.N-2038  
 斎藤活版所 (二宮村) N-2387  
 齋藤兼蔵 (琳琅閣、下谷) N-431.N-707.N-1035.N-1215.N-2019.N-2206  
 櫻井書店 (新潟市) N-1477  
 鹿田静七 (シカタ・書林、鹿田松雲堂、大阪東区) N-174~176.N-309.N-392.N-411.  
 N-476.N-503.N-672.N-677~679.N-733.N-734.N-740.N-795.N-806.N-869.N-878.N-939.N-970.  
 N-971.N-1043.N-1056.N-1078.N-1182.N-1277.N-1308.N-1470.N-1480.N-1540~1543.N-1566  
 ~1573.N-1603.N-1644.N.1685.N-1734.N-1894.N-2011~2013.N-2055.N-2200.N-2201.  
 N-2256.N-2315.N-2-61-7.N-2-61-32.V-1-57
- 市町村雑誌社 (京橋) N-1992  
 島村利助 (書店カ (シーボルト本扱い、日本橋) N-870  
 秀[ ]社 (京橋) N-2122  
 裳華堂 (書肆、日本橋) N-1718  
 書物出版所 (日本橋) N-1358.N-1553  
 成章写真部 N-2247  
 政論社 (出版社・京橋) N-225.N-427.N-1079.N-1617.N-1647.N-1694.N-1752.N-1942.N-2397.  
 N-2400  
 書籍御経類調進所 (京都三条通) N-472  
 大成学館出版局 (麴町) N-1797  
 大盛館 (石版銅版彫刻印刷営業、神田) N-2073  
 大日本史料大日本古文書出版事務所 (小石川) N-1980.N-2082.N-2293  
 大日本通報社 (麴町) N-926  
 哲学書院 (書林、本郷) N-1231.N-1232.N-1899.N-2050.N-2403

[資料-4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

N-1107.N-1116.N-1125.N-1244.N-1259~1261.N-1290.N-1292.N-1337.N-1339.N-1367.  
N-1397.N-1398.N-1447.N-1481.N-1558.N-1651.N-1663.N-1897.N-1904.N-1919.N-2052.  
N-2053.N-2057.N-2068.N-2080.N-2094.N-2100.N-2292.N-2366.N-2429.V-1-22.V-1-30

朝野新聞社内花月社(銀座) N-830.N-2081.N-2101

成島柳北(天保8年2月16日-明治17年11月30日)、幕末の江戸幕府・將軍侍講、奥儒者、文学者、ジャーナリスト、明治時代以降はジャーナリストとしても活躍、姪孫に俳優の森繁久彌がいる事でも著名、明治7年に『朝野新聞』を創刊、初代社長に就任) W-3-1.W-3-2

新潟新聞社 N-165.N-1161.N-1865.N-2318

新潟東北日報社 N-28.N-41.N-196.N-344.N-1166

大桃相資(新潟東北日報社) N-1098

新潟日日新聞社 N-1041.N-1455.N-1580.N-2166

内山信太郎(新潟日日新聞社長) N-47.N-50

北陸政論社(富山市) N-1617

本間慶四郎(佐渡新聞社長) N-1872.N-1925

毎日新聞社(京橋) N-1735.N-2079

都新聞社 N-1434

山田毅城(新潟新聞記者) N-824

若生精一郎(宮城日报社) N-827

【出版社・書店・古書店・古物商】

相川活版所 N-1226

青山清吉(古書肆、青山堂雁金屋、小石川) N-1928

浅倉屋吉田久兵衛(文政6年-明治38年3月22日、貞享年間からの神田古書店、文淵堂・文積と名乗る) N-116.N-118.N-170.N-172.N-177~191.N-256(浅草).N-340.N-676.N-696~699.N-718~720.N-738.N-786.N-788.N-857.N-876.N-941.N-1070.N-1409.N-1574.N-1575.N-1578.N-1595.N-1634.N-1681.N-1746.N-1748.N-1857.N-1861.N-2009.N-2014.N-2020.N-2114.N-2137.N-2185~2189.N-2219.N-2295.N-2300.N-2-12-1.N-2-61-6N-2-61-7.N-2-61-12.V-1-59

穴山篤太(書肆、京橋) N-1129

イーグル書房(神田) N-623.N-2164

石西尚一(大石堂活版所、大阪府諸達書御用印刷人) N-1820

和泉屋勘兵衛(古書店、新橋) N-668.N-1559(芝)

岩本米太郎(古書肆二三屋・芝) N-139.N-308.N-345.N-370.N-425.N-706.N-708.N-815.  
N-1071.N-1108.N-1640.N-1902.N-2161.N-2231.N-2241.N-2280.N-2372.P-8

江森保存(麴町) N-951

大橋操吉(書林、神田) N.1162

亀田一恕(古銭商・日本橋) N-78.N-227.N-801(下谷).N-1030(本郷).

乙部鼎（朝野新聞社主）N-895

改進黨新聞三益社（改進黨系の小新聞、1878年1月『有喜世新聞』の名で創刊され、政府の発行停止処分のため83年『開花新聞』として新発足、84年8月から『改進黨新聞』と改題、『郵便報知新聞』と姉妹関係にあった、京橋）N-1105

協同倶楽部（京橋）N-74.N-173

陸羯南（クガガツナン）実（安政4年丁巳10月14日-明治40年9月2日、国民主義の政治評論家、日本新聞社長、正岡子規を育てる、幼名は巳之太郎、のち実、号が羯南、弘前生）W-3-5

国友重章（1861-1909 明治時代のジャーナリスト、文久元年12月生、法制局勤務ののち新聞「日本」の記者となり、大隈重信の条約改正案に反対、また明治28年朝鮮の「漢城新報」主筆として閔妃暗殺事件に連座するなど、国権論者として行動、明治42年7月16日没、49歳、肥後出身、号は随軒）W-3-10.W-3-13

国民新聞社（京橋）N-83.N-156.N-306.N-498.N-704.N-1551.N-1581.N-2041.N-2379

近藤吉左衛門（佐州新聞社創立人）N-1353

斎藤捨蔵（新潟新聞社）P-52

齋藤傳十郎（佐州新聞社創立人）N-1353.N-1355

佐藤新聞社（相川）N-601

佐渡新聞社 N-1986.N-2268.Q-155.V-1-23

時事新報社（京橋）N-655

時事通信社（京橋）N-721

自由新聞社（新潟市）N-1628

大日本週報社（麴町）N-1180

伊達喜太郎（佐渡新聞記者）N-2028

東京新報社（京橋）N-5

東京日日新聞日報社 N-1855

東西新聞両文社（京橋）N-194.N-915.N-1104.N-1401

東北日報社（新潟市）N-645.N-912.N-1179.N-1243.N-2059.N-2312

東洋自由新聞社 N-1291

東洋新報社 N264.N-1144

日本新聞社（神田）N-145.N-197.N-329.N-330.N-332.N-335.N-389.N-526.N-700.N-820.N-963.  
N-964.N-1313.N-1664.N-1903.N-1997.N-2130.N-2176.N-2193.N-2197.N-2298.N-2391.V-1-19.  
V-1-51.V-1-58

多川常澄（新潟日日新聞社）N-634

富樫苗明（有明新聞、1887年有明新聞を創刊するひとり、翌年に東北日報と改題、自由党系の新聞となる）N-70.N-96.N-158.N209.N-1560.N-1661

高野間蔵（新潟新聞社主筆）N-57.N-200.N-340

高橋又三郎（佐州新聞社創立人）N-1353

朝野新聞社（銀座）N-353-N-355.N-367.N-513.N-774.N-804.N-826.N-834.N-887.N-1014.

[資料 - 4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

丸八商店 (相川) N-350.N-1296.N-1474.N-1589.N-1971.N-2008.N-2450  
山形屋白須甚右衛門 (旅人宿及び回漕店、佐渡夷港) N-132  
山城屋 (上野鉄道前御旅亭) N-439  
山城屋支店 (上野停車場前旅亭) N-1523.N-1770  
與板屋 (二見湊) N-1019.N-1257  
吉田かね (旅館吉勘、新潟市) N-685.N-736.N-1072.N-2084  
吉沼又右衛門 (時計及宝玉類貴金属美術品商、日本橋) N-2138  
吉野屋旅館 (佐渡郡河原田寺町) N-245.N-617.N-1584.N-1778  
立身館 (たつみや旅館、相川) N-2250.N-2448  
鷺屋回送店 (神田) N-812

【新潟県庁・県会議員】

阿部浩 (第11代新潟県知事) W-6-21  
川上喜右衛門 (県会議員) N-1446  
高野宏策 (明治42年佐渡味噌組合長、相川銀行支配人取締役、郡会議長、佐渡商船会社相談役、電力工業組合長、県会議員) N-1240.N-1471  
遠山属 (新潟県庁土木課) P-31  
富岳磯平 (天保14年-明治39年、代々庄屋の家柄である松沢清左衛門の2男、西海の釜沢村 (現糸魚川市釜沢) に生まれ、20歳で回船業・室屋磯兵衛の長女と結婚し養子となる、県議会議員として活躍する一方、明治16年、歌村 (現糸魚川市歌) で設立した歌石灰会社社長に就任、明治21年には越後セメントを設立し実業家としての手腕も発揮、明治35年から39年まで青海村村長を歴任) N-1323  
新潟県議会第一部会議課 N-52.N-726.N-811.N-1186.N-1393.N-1411.N-1459.N1751  
新潟県庶務課 N-1959  
長谷川三男三郎 (県会議員、ボタン栽培) N-1318.N-1674  
本間一松 (新潟県会議員、新穂村長) N-1267.N-1365  
山口権三郎 (新潟県会議長) N-2170.P-60  
渡邊萬治 (嘉永4年-大正11年、公立病院魚沼郡病院設立、製糸改良共同組合設立、明治16-24年新潟県議会議員を務めたのち、北海道へ移住) N-292.N-373.N-1230.N-1319.N-1453

【報 道】

石塚甚吾 (佐州新聞社創立人) N-1353  
伊藤喜太郎 (新報社) V-1-41  
内山信太郎 (新潟日日新聞社) N-917.N-2150.N-2168  
絵入新聞両文社 (銀座) N-1022  
大阪朝日新聞社 N-933  
太田彦次 (東京新聞新潟野口支店) N-338



- 小林群鳳（摺師・彫刻師、榎原村）N-1742  
 子安久（洗心楼王之湯、箱根）N-1741  
 桜田麦酒会社（麹町）N-2421  
 佐藤伊左衛門（廻船業、宿根木）N-1110  
 澤田佐助（大阪酒問屋）N-69  
 島田庄三郎（京橋・玉屋分店・帽子店）N-267.N-1838  
 常山陶器義社事務所（明治9年新潟県佐渡の三浦常山が無名異焼を改良して創始した陶器、朱泥・紫泥系で、茶器が多い）N-1804.N-2410  
 清響館（中山道追分旅籠屋油屋支店、中山道軽井沢停車場前）N-608  
 清新亭（割烹、相川）N-2335  
 関屋旅舎（下野国佐野町）N-938  
 谷久商店（新潟市）N-1477  
 玉屋宮田藤左工門（天文・測量機器販売、銀座）N-100.N-416.N-892  
 帝国ホテル N-1673  
 動物標本社（諸官省諸学校御用、神田）N-2033.N-2251  
 供待休憩所事務所（麹町）N-1100  
 中沢丑太郎（表具師、新潟市）N-538.N-539.N-981.N-2346  
 中澤正平（廻船問屋廻漕店、新潟市）N-609  
 中山和吉（呉服商カ、京都）N-1381  
 新潟商会（旅人宿・回漕業）N-193  
 布川洋品店（新潟市）N-648.N-840.N-1450  
 野口五三郎（回漕業、越佐汽船株主、新潟市）N-107.N-123.N-285.N-317.N-334.N-346.  
 N-349.N-428.N-746.N-757.N-758.N-762.N-837.N-942.N-984.N-1150.N-1382.N-1430.N-1442.  
 N-1476.N-1645.N-1693.N-1761.N-1807.N-1911.N-1965.N-2056.N-2062.N-2077.N-2083.  
 N-2173.N-2365.N-2370  
 花房屋新之助（英盛館、長野市）N-1967  
 原田長太郎（寿司店、相川）N-465  
 風月亭主人（相川）N-287  
 深山助一（三鱗、函館）N-2178  
 福島屋洋服店（京橋）N-361.N-682.N-802.N-1329.N-1772.N-1891  
 堀治作（羅紗類洋服仕立物総テ西洋品一式、新潟市）N-212.N-1080.N-1167.N-1168.  
 N-1276.N-1310.N-1399.N-1486.N-1944.N-2091  
 堀清作（洋服店、新潟市）N-463  
 本田寅吉（大坂屋、新潟市）N-916.N.1046.N-1373.N-1513.N-1669.N-1754.N-1972.N-2015.  
 N-2244.N-2319.N-2357.N-2382.N-2427  
 前川笙東（藤本合名会社、大阪市）N-1776  
 ますや三郎平（旅館、長岡市）N-2025.N-2051  
 松永一作（中川商店、北海道天塩国増毛郡弁天町）N-412

[資料-4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

大矢篤太郎（佐渡銀行支配人）N-1246  
上山武右衛門（越佐汽船会社）N-238  
川嶋久壽蔵（越佐汽船株主→新潟汽船）N-66  
旧信越鉄道会社事務所残務掛（越後高田町室孝二郎方）D-6-54  
清水誠（金沢の実業家、弘化2年12月25日-明治32年2月8日、マッチの製造で知られる）N-155.Q-144  
信越鉄道会社創立事務所 D-6-57-1.D-6-57-2.V-4-1-2.V-4-1-4.V-4-1-6  
高田慎蔵（嘉永5年2月2日-大正10年12月26日、明治大正期の機械貿易商）N-266  
古川求次（越佐汽船会社）N-2381  
古川敬次（越佐汽船会社）N-835.U-7-4-11  
山本鐵三郎（三井銀行、山口県）N-113.N-1383（大牟田）.N-1654（新町）  
吉田鉄三郎（三井銀行支店）N-127  
渡部八十八（帝国生命保険会社代理店）N-1971

【商人・商店】

油屋助右衛門（中山道追分旅籠屋）N137.N-430.N-517.N-1602.N-2106.N-2345  
荒井太助（旅人宿、芝）N-1898  
石關庄兵衛（唐木細工粧飾家具製造本舗、日本橋）N-1379  
石塚三四吉（質屋古着水産物商佐渡荒物委託販売、稚内港）N-1223.N-1780  
石關庄兵衛（銘木美術品家具製造所本舗、京橋）N-1008  
出雲屋榮太郎（旅人宿、相川）N-1749  
若戸屋平左衛門（旅館、柏崎）N-851  
内浦海産会社 N-983  
江戸屋（佐渡河原田町旅舎）N-228  
扇屋金四郎（長野ホテル五明館主）N-272  
大坂屋店（新潟市内に安政年間に創業した老舗菓子舗カ）N-669  
桜郷館（貴頭紳商御旅館・芝）N-326.N-625.N-2432  
桜郷軒（旅舎、芝）N-1141.N-1800  
太田彦次（旅人宿廻漕業野口支店、新潟市）N-914  
大塚益郎（薬酒仙桃酒製造元（三島郡片貝）、県議会議員、山口達太郎とも近く北越水力電気株式会社、中央石油株式会社、日本電気工業株式会社、長岡銀行、新潟商業銀行など取締役、新潟の豪商斉藤家庫之助の妻マツの実家）N-72  
大西商店（新潟市）N-1728.N-1966  
風間惣八（指物職、新潟市）N-1033.V-1-14  
加藤良助（輔）（唐木細工所、神田）N-1037.N-1666.N-1667  
木村谷（ママ）洋服店木村直二郎（芝区）N-133  
小出商店（西洋品商、新潟市）N-372.N-437.N-626.N-686.N-940.N-1593  
兒玉商店（葡萄酒醸造諸岳詰製造和漢洋薬舗、五十里町）V-1-2

- 大日本水産会（明治15年設立の水産業の総合団体）N-1127.N-1311.N-2342  
高橋辰五郎（北越勤儉会事務所幹事、新潟市）N-315  
竹内圓蔵（帝国農家一致協会庶務課長）N-313  
地価調査同国会 N-822.N-1525.N-1736  
帝国農家一致結合事務所 N-817  
鉄道期成同盟会員 N-904  
東京人類学会事務所（日本人類学会は明治17年）、当時東京大学理学部学生であった坪  
井正五郎ら10名により結成された「じんるいがくのとも」という団体に端を發し、  
明治19年には機関誌の第1号を出版し、同時に会の名称は「東京人類学会」に変  
更）E-167.N-844.N-847  
東京能弁学会（本郷）N-427  
東邦協会（明治24年7月に創立されたアジア・太平洋地域研究団体・京橋）  
N-75.N-162.N-232.N-307.N-325.N-356（芝）.N-372（神田）.N-506.N-525.N-633  
（住所ナシ）.N-639（神田）.N-647.N-651（住所ナシ）.N-750（神田）.N-799.N-807.N-818.  
N-1120（京橋）.N-1136.N-1147（神田）.N-1184.N-1188.N-1205（京橋）.N-1211（麹町）.  
N-1237（京橋）.N-1346.N-1482（神田）.N-1502.N-1630.N-1643.N-1649.N-1811.N-1826  
（麹町）.N-1906（京橋）.N-1907.N-1939.N-2140.N-2199（神田）.N-2317.N-2332  
（京橋）.N-2352（神田）.V-1-50（京橋）  
中村和二郎（帝国農家一致結合事務所弁理）N-341.N-2061.N-2277  
中村敬太郎（日本労働組事務所、麹町）N-643  
新潟県水産会 N-1492  
新潟県非増租同盟会幹事 N-2177  
新潟県友会 N-2048  
日野卿建社創立仮事務所（新町）N-471.N-612  
米北交渉事務所 N-845.N-1702  
北陸七州懇親会事務所（高田）N-2175  
民友社（徳富蘇峰により設立された、戦前日本の言論団体・出版社、明治20年設立、  
昭8年解散）N-833.N-1395.N-2042.N-2218.N-2232

【経済界・実業家】

- 相川銀行羽茂支店 N-1004  
板津與平（越佐汽船取締役）N-1759  
越佐汽船 N-91.N-536.N-644.N-2442  
越佐汽船夷支社 N-1711  
大倉喜八郎（天保8年9月24日-昭和3年4月22日、明治・大正期に貿易、建設、化  
学、製鉄、繊維、食品などの企業を数多く興した日本の実業家、中堅財閥である大  
倉財閥の設立者、渋沢栄一らと共に鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場などを設立、東  
京経済大学の前身である大倉商業学校の創設者、従三位男爵、号は鶴彦）N-266

[資料-4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

誌」編纂) N-18.N-115.N-1449.N-1512.N-1774.U-7-1-17~22.W-4-13.W-4-14

平井斌夫 (アヤオ、朝鮮政治・法制史家、「簡易註解朝鮮現行法規便覧 全」1912)  
N-64.N-244.N-2245

馬嶋杏雨 (マシマ、会津藩士、詩文書を能くし、安政年間江戸に住、大正9年没、  
96才、『画銭譜』上・下の編者、校訂亀田一恕) N-615.N-1414.N-1528.N-1531~1534.  
N-1864.P-63

丸山嵯峨一郎 (弁護士、新潟市) N-1816 (芝)

元良勇次郎 (モトラ、安政5年11月1日~大正元年12月13日、日本最初の  
心理学者) W-3-12

安田祐太郎 (弁護士、日本橋) N-88

渡邊辰五郎 (天保15年8月~明治40年5月26日、千葉県長生郡長南町生まれの裁縫教育  
家) N-423.N-1602

【研究団体・各種団体】

相川四十物業組合事務所 N-529

愛国協会本部 (岐阜市) N-378

愛知県下瀬戸町委員 N-1719

磯村兌貞 (ダテイ、警察監獄学会、四谷) N-1932

大坂月曜会 N-934

協同倶楽部世話人 N-1792

金蘭会幹事 (夷) N-1363

警察監獄学会 (四谷) N-1929.N-1990

考古学会 (神田) N-1380.2329.V-1-52 (本郷)

小牧町委員 (愛知県) N-1506

斯文学会 (理事課) (明治13年東洋の學術文化の交流を意図した岩倉具視が谷干城らと  
図って創設。これが発展して大正7年公益財団法人斯文会となる、孔子祭の挙行、  
公開講座の開講、學術誌『斯文』の発行などを中心に活動) N-754.N-968 (幹事) .N-  
969 (理事課) .N-989.N-1332 (出納課) .N-1336 (理事課) .N-1340 (出納課) .N-1351.  
N-1368~1371 (理事課) .N-1429 (出納課) .N-1840.N-1841.N-1896 (東京斯文會書籍取  
扱所) .N-2291 (会幹)

上越鉄道期成同盟会事務所 N-1500

商法延期同盟会 N-2423

条約改正研究会 (芝) N-662.N-989.N-1213.N-1407.N-1598.N-2111.N-2512

殖民協会 (明治26年3月11日に移住殖民を日本の國是とみなして発足した亜細亜・南  
洋研究団体) N-406.N-1646.N-1805.N-2416

政務調査所 (赤坂) N-652

大同団本部 (京都市) N-2086

大日本監獄協会 (牛込) N-695

心」は岡倉が詩作などの際に用いた号であるが、生前には「岡倉天心」と呼ばれることはほとんどなく、本人はアメリカでも本名の岡倉覚三 (Okakura Kakuzo) で通っていた) W-3-19

日下部東作 (書家、近江彦根の人、字は子暘、明治2年東京に出て太政官大書記、後年は書をもって身をたてる) N-1252.P-97

小金井良精 (ヨシキヨ、安政5年12月14日-昭和19年10月16日、明治から昭和にかけて活躍した解剖学者・人類学者、森鷗外の妹婿であり、星新一の祖父、越後長岡藩士で家老河井継之助に信任を得て郡奉行等の長岡藩要職を歴任、長兄は自由民権運動家で衆議院議員を務めた小金井権三郎) N-670

小林魁郎 (カイロウ、法律学者カ) N-670

瀬下清通 (セシモキヨミチ、弁護士、明治元年に佐渡生、13歳の時慶應義塾に入り、後帝国大学別科に進んで法律を学ぶ、卒業して代言人試験に合格、26年弁護士、35年アメリカ留学、コロンビア、カソリック両大学を卒業、さらにヨーロッパを歴遊、法理に詳しく弁論が巧みで中央法曹界の名望家となる。大正4年3月の衆議院議員選挙に佐渡で山本悌二郎と争い落選した) N-76.N-1155.P-77.P-124

鈴木治郎 (弁護士、会津若松) N-93.N-377 (仙台) .N-385 (会津若松) .N-982.N-1197 (仙台) .N-1201.N-1352 (在新潟) .N-1501 (会津若松) .N-2022 (仙台) .N-2116. N-2351 (会津若松)

高崎清 (正) 風 (天保7年7月28日-明治45年2月28日、志士、作詞家、二条派の歌人、通称は左太郎、他に伊勢、豊磨、左京とも、号は宝義堂、薩摩国鹿児島近在川上村出身、明治8年宮中の侍従番長、翌年から御歌掛、明治19年二条派家元三条西季知の後を受け御歌係長、さらに明治21年には御歌所初代所長、明治23年皇典講究所所長山田頭義の懇請により初代國學院院長 (明治26年まで)、明治28年枢密顧問官を兼務) W-4-11

太刀川文吉 (「新潟県治布達類別」編者、芝) N-21.N-34 (日本橋) .N-68.N-122 (京橋) .N-223 (日本橋) .N-333.N-348.N-381.N-382.N-480.N-486.N-541.N-625.N-676 (芝) .N-702. N-739 (京橋) .N-859 (芝) .N-873 (京橋) .N-956 (日本橋) .N-1060.N-1106.N-1143 (芝) .N-1194 (日本橋) .N-1207.N-1248.N-1274 (芝) .N-1275.N-1377 (日本橋) .N-1390.N-1468. N-1576 (芝) .N-1760 (日本橋) .N-1762.N-1913.N-1995 (京橋) .N-2045 (日本橋) .N-2182. N-2224.N-2362.P-17.P-65 (芝) .R-6.V-1-15 (日本橋)

鳥井錦次郎 (弁護士、新潟市) N-1064.N-1923

富田祐太郎 (富田法律事務所、日本橋) N-2234

永井庄吉 (新潟県弁護士会、新発田) N-897

中嶋 (鳥) 吉次郎 (弁護士、相川) N-691.N-2449

長倉雄平 (新潟第一師範学校校長) N-436

南摩綱紀 (ナンマ、文政6年11月25日-明治42年4月13日、武士 (会津藩士)、教育者、通称は八之丞、号は羽峯) W-3-11

萩野由之 (歴史学・国文学者、東大名譽教授、佐渡相川出、「佐渡国誌」「佐渡人物

岡次郎太郎 (国権党) N-1545

憲政本党党報局 (麴町) N-2139

憲政本党新潟支部 N-495.N-603

国民自由党事務所 (麴町) N-2309

進歩党新潟支部幹事 N-1495.N-2418

杉田定一 (天真社 (法理研究所、地租改正反対運動のエネルギーを国会開設請願運動から地方政党樹立へと進展させるため、自郷社を発展的に解消して設立) の社長) P-54.P-69.U-7-1-1

政勢調査所 (赤坂) N-1597

大同倶楽部 (日本最初の自由党解散後、大同団結運動の一片として、明治22年5月10日に結成され、翌明治23年8月17日に解散) N-732.N-1095 (旧大同倶楽部) 地租軽減会 N-823

地租軽減期成全盟会 (京橋) N-1007.N-2207

地租軽減同盟 N-656.N-1684

同友会 N-134

独立倶楽部 N-402.N-775

長瀬汀 (地租改正反対運動のエネルギーを国会開設請願運動から地方政党樹立へと進展させるため、自郷社を発展的に解消し、新たに天真社 (法理研究所) を設立、その教師、杉田定一はその社長、福井市) N-1372

前田下學 (回天社総代、前田案山子の長男、明治13年に前田案山子を中心となって山約水盟会という自由民権結社が設立され、これは全国に先駆けた運動であり、このメンバーの中で中心的役割りを果す) N-1781.N-1828.N-2437.N-2445.P-37

令知会 (結社 (麴町)、浄土真宗本願寺派の島地黙雷、赤松連城や真宗大谷派の南条文雄、吉谷覚寿らが結成、「令知会雑誌」97号まで、98号から「三寶叢誌」と解題) N-43.N-51.N-291.N-661.N-726.N-948.N-949.N-1203.N-1652.N-1874 (三寶叢誌発行所) .N-2029

#### 【学者・弁護士】

井上圓了 (安政5年2月4日-大正8年6月6日、仏教哲学者、教育家、新潟県三島郡越路町にある真宗大谷派の慈光寺生) W-3-18

遠城兵造 (遠城謙道息か、細菌学者) N-1943

柄澤寛 (弁護士、相川) N-2216.N-2257

岡倉天心 (覚三) (文久2年12月26日-大正2年9月2日、日本の思想家、文人、本名は岡倉覚三、幼名は岡倉角蔵、福井藩の武家の子として横浜に生まれる、東京美術学校 (現・東京芸術大学の前身の一つ) の設立に大きく貢献、また日本美術院を創設、近代日本における美術史学研究の開拓者で、英文による著作での美術史家、美術評論家としての活動、美術家の養成、ボストン美術館中国・日本美術部長といった多岐に亘る啓蒙活動を行い、明治以降における日本美術概念の成立に寄与、「天

を退任し、22年に息子の矢野一郎が社長に就任、また、第一相互貯蓄銀行（協和銀行を経て現在のりそな銀行）を設立、目黒蒲田電鉄、東京横浜電鉄両社の社長も歴任、日本国勢図会を発刊）P-119

山添武治（青年期民権運動に捧げた行動派民権家、明治21年北越青年倶楽部結成して山際七司の活動支援、明治30年代以降は新聞経営に乗り出し、33年「自由新報」を「新潟日報」に改題し、面目を一新、また39年「新潟中央新聞」創刊するも41年新潟大火で類焼、43年「新潟毎日新聞」発刊、紙面刷新・印刷高速化・ニュース速報など同新聞発展の基礎を築く）N-87.N813.N-1130.P-69

吉田正春（外交官、土佐藩士吉田東洋嫡男）N-90.N-1821.P-76.U-7-1-26

若宮正音（農商務省商工局長）W-2-14.W-2-15

鷺頭信恭（青年民権家、長岡）N-1692

### 【軍 人】

浅井吉太郎（仙台市陸軍予備病院）N-1309

石川道太郎（近衛兵第3聯隊補充大隊第3中隊第10班）N-2262.N-2275（台湾守備歩兵第2聯隊第5中隊）

石黒忠恵（タダノリ、弘化2年2月11日-昭和16年4月26日、明治時代の医師、日本陸軍軍医、草創期の軍医制度を確立、爵位子爵、学位は医学博士）N-266.W-3-8.W-3-9

石塚敬一（村松歩兵第30聯隊第11中隊）N-1118.N-1713.N-2275.P-84.P-90

酒田然太郎（陸軍士官学校）N-1061

酒田龍太郎（近衛騎長）N-1415.N-1623.N-2253

中村雄次郎（嘉永5年2月28日-昭和3年10月10日、陸軍の軍人、政治家、陸軍中将勲一等功四級男爵、貴族院議員、伊勢国一志郡波瀬村生、陸軍大学校教授、参謀本部陸軍部第一局第一課長、砲兵第一方面提理、陸軍省軍務局砲兵事務官長、陸軍士官学校校長、陸軍次官兼軍務局長等を歴任、明治40年に日清、日露戦争の功により男爵の爵位を賜る、貴族院議員、八幡製鉄所長官、南満州鉄道総裁、宮内大臣、枢密顧問官等も務める）W-6-13

藤井愛（近衛歩兵第4聯隊第1中隊）N-1582.N-1859

藤井応吉（海軍人、横須賀）N-80.N-675.N-1054.N-1596.N-1656.N-2283

藤井甚次郎（歩兵第30聯隊第4中隊第2給養班）N-220.N-1753

藤井吉松（村松歩兵第30聯隊第11中隊）N-1777

本間武吉（野戦砲兵第2聯隊補充中隊）N-207.N-2026.N-2210

### 【結社・政党】

池襄一（明治20年吉井ほか5か村の戸長、明治26年旧自由党系の佐渡自由倶楽部評議員に選ばれて以降、憲政党・政友会の役員歴任）N-1689

出塚助太郎（越佐同盟会）N-102.U-7-1-9

越佐同盟会理事長（旧自由派、明治21年11月結成）N-376

[資料-4] 鶴飼郁次郎宛書簡・業書類発信者リスト

- 竹添進一郎(1841-1917、外交官・漢学者、熊本県生、儒者木下厚潭の門下、熊本藩士として国事に奔走、木下門下の四天王の一人、明治維新の際に藩の参謀となり、8年大蔵省に出仕、のち天津領事・朝鮮弁理公使・北京公使館書記官・韓国弁理公使等を歴任するが、清仏戦争に際し甲申事変を引き起こし公使を辞任、東大で経書を講じたがのち辞し、著作活動に専念、学士院賞受賞、大正6年没、76才) W-5-11. W-5-12
- 田中稻城(安政3年1月6日-大正14年2月22日、官僚、図書館学者で、日本の国立図書館であった帝国図書館の初代館長) N-1863.W-3-20.W-3-21
- 玉井貞太郎(佐渡政党史稿登場人物) N-1441.N-2004
- 富田精策(自由民権家、新発田浄土真宗長徳寺に大正2年に「武脩会」を発足させたひとり) N-407.N-479.N-1461
- 中村太八郎(慶応4年2月20日-昭和10年10月17日、長野県東筑摩郡山形村出身の普選運動の活動家) N-1366.N-1622
- 本間勝作(北越青年倶楽部) N.813
- 本間吾市(佐渡政党史稿登場人物) E-275-2
- 牧野襄一(弁護士、佐渡政党史稿登場人物、相川) D-6-31.N-1164.N-1165.N-1625.N-2243. N-2324
- 益田克徳(嘉永5年1月-明治36年4月8日、幕末期の幕臣で明治期の官吏、実業家、政治家、東京海上保険創立者、幼名は莊作、号は無為庵、非黙、佐渡生) P-85.W-2-16
- 丸岡重五郎(民権家、相川) N-1063
- 三國源吉(佐渡政党史稿登場人物) N-907
- 宮地茂平(万延元年-大正7年、明治時代の自由民権運動家、水戸を拠点に国会開設運動を展開、明治14年栗村寛亮と連名で、太政大臣三条実美あての「日本政府脱管届」を茨城県庁に提出、懲役100日に処せられる、のち東京で法律事務所を開く、大正7年5月28日死去、59歳、土佐出身) N-171
- 三輪梅吉(佐渡政党史稿登場人物) N-1892
- 森知幾(自由民権家、佐渡新聞主筆、柏倉一徳は兄) N-606.N-690.N-798.N-853.N-1085. N-1338.N-1590.N-1629.N-1978.N-2420.Q-155
- 矢野恒太(慶応元年12月2日-昭和26年9月23日、明治期から大正期に生命保険業界の基礎を築いた実業家、第一生命保険創業者、医師、日本アクチュアリー会初代代表、「相互会社の産みの親」と呼ばれ、「蒼梧」と号す、備前国上道郡角山村生、第三高等中学校医科(後の岡山医専、現・岡山大学)を卒業後、明治23年に日本生命に診査医として就職、25年に経営陣との対立から退社し、安田生命(現・明治安田生命保険)の前身である共済生命保険の設立に関わり、その後、支配役となる、30年に退社、農商務省の嘱託職員として保険業法の起草に参画、その後、農商務省保険課長に就任、35年に日本初の相互会社形式での第一生命保険を設立、後に社長に就任、昭和13年に石坂泰三が社長に就任すると、自らは会長に就任、21年に会長



- 風間儀太郎（佐渡政党史稿登場人物）N-1443.N-1488.N-2032.P-9.P-14
- 勝海舟執事（勝海舟、安芳、文政6年1月30日-明治32年1月19日、江戸時代末期から明治時代初期の武士（幕臣）、政治家、位階勲等爵位は正二位勲一等伯爵、山岡鉄舟、高橋泥舟と共に「幕末の三舟」と呼ばれる、10代の頃から島田虎之助に入門し剣術・禅を学び直心影流剣術の免許皆伝となる、16歳で家督を継ぎ、弘化2年から永井青崖に蘭学を学んで赤坂田町に私塾「水解塾」を開く、安政の改革で才能を見出され、長崎海軍伝習所に入所、万延元年には咸臨丸で渡米し、帰国後に軍艦奉行並となり神戸海軍操練所を開設、戊辰戦争時には、幕府軍の軍事総裁となり、徹底抗戦を主張する小栗忠順に対し、早期停戦と江戸城無血開城を主張し実現、明治維新後は、参議、海軍卿、枢密顧問官を歴任し、伯爵に叙せられる、李鴻章を始めとする清国の政治家を高く評価し、明治6年には不和だった福澤諭吉らの明六社へ参加、興亜会（亜細亜協会）を支援、また足尾銅山鉍毒事件の田中正造とも交友があり、哲学館（現：東洋大学）や専修学校（現：専修大学）の繁栄にも尽力）W-2-23
- 川上金十郎（古志郡自由民権家）N-208.N-780
- 河原貫作（佐渡政党史稿登場人物）N-1908
- 岸本種次郎（美作国東南条郡高野村長）W-2-1.W-2-2
- 清田益太郎（佐渡政党史稿登場人物）O-23-22-2
- 銀林綱男（天保15年3月19日-明治38年9月20日、幕末の尊攘運動家、明治期の内務官僚・実業家、越後国頸城郡出身）N-266
- 久我懋正（シゲマサ、民権家）N-1366
- 河野敏謙（コウノトガマ、明治時代初期の藩閥政府の政治家、子爵、萬壽彌）N-60
- 兒玉甚右衛門（佐渡政党史稿登場人物）N-1717
- 籠手田安定（コテダヤササダ、天保11年3月21日-明治32年3月30日、平戸藩藩士、剣術家、政治家、旧名は桑田源之丞、滋賀県知事、元老院議員、島根県知事、新潟県知事、貴族院議員を歴任、心形刀流と一刀正伝無刀流の免許皆伝、山岡鉄舟から一刀流正統の証の朱引太刀を授けられる）W-5-13
- 後藤一作（佐渡政党史稿登場人物）N-2203
- 後藤五郎右衛門（佐渡政党史稿登場人物）N-1036.V-1-63
- 駒林廣連（条約改正研究会）U-7-1-24
- 近藤甚作（佐渡政党史稿登場人物）D-6-122.D-6-126
- 笹井祥作（佐渡政党史稿登場人物）N-1588.N-1912
- 笹本弘海（佐渡政党史稿登場人物）N-1926
- 柴田浅五郎（民権家、南秋田郡）V-1-29
- 渋谷良折（佐渡政党史稿登場人物）P-81
- 首藤陸三（条約改正研究会）N-660.U-7-1-24
- 杉村卯之吉（佐渡政党史稿登場人物）N-1159
- 鈴木紀太郎（佐渡政党史稿登場人物）N-1557
- 関谷貞太郎（自由民権家・東頸城郡）N-321

〔資料－４〕 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

- 員（当選４回）、大正３年３月２４日死去、６３歳）N-420.P-86.P-126.U-7-1-10.W-1-1～7  
吉岡倭文麿（第１・２回衆議院議員選挙島根６区当選議員）N-884.W-2-9  
依田佐二平（弘化３年-大正13年、明治-大正時代の実業家、政治家、弘化３年２月10日  
生、依田勉三の兄、家は伊豆大沢村（静岡県松崎町）の名主、静岡県会議員、賀茂  
郡長などをへて明治23年衆議院議員、養蚕・製糸業のほか海運業にも取り組み、15  
年松崎汽船を創立、豆陽学校の設立にも尽くす、大正13年10月15日没、79歳）P-118  
頼俊直（頼山陽の実家、第４回衆議院議員選挙広島５区当選）W-1-12  
若原観瑞（第２若・５回衆議院議員選挙当選、鳥取２区）N-1402  
渡邊国武（弘化３年３月３日-大正８年５月11日、日本の官僚、政治家、子爵、旧姓は  
小池、第２次伊藤内閣の大蔵大臣、通信大臣、第4次伊藤内閣の大蔵大臣を歴任、字  
は無辺侠禅）W-5-2  
渡邊又三郎（第１・２・５回衆議院議員選挙当選、広島県）W-1-13

【政治家・自由民権家・官僚】

- 青木永太郎（佐渡政党史稿登場人物）N-882.N-1280.N-1858.N-1868.N-2314.T-4-9-1.T-4-1-  
9-3.T-4-1-9-4  
明石璧（佐渡政党史稿登場人物）N-943.N-1271.N-1514.N-1976.N-2371  
赤塚左一郎（佐渡政党史稿登場人物）N-1091.V-1-40  
綾井武夫（自由民権派、前田案山子と雑誌回天刊行、京橋）N-1094.P-87  
荒川太二（新潟市議、県会議員、国会開設請願者）N-1012  
池野謙吉（佐渡政党史稿登場人物）N-1818.P-72  
石川弥八（佐渡政党史稿登場人物）N-1714.N-1793.N-1950.N-2390.N-2414.N-2426  
石川林平（佐渡政党史稿登場人物）E-275-2  
石塚秀策（嘉永５年中興村生、明治13年ころから国会開設で鶴飼郁次郎に共鳴）N-40.  
N-125.N-805.N-843.N-1003.N-1018.N-1183.N-1298.N-1493.N-1504.N-1682.N-1737.N-1964.  
N-2090.N-2110.N-2125.P-56.Q-47-2.W-7-20  
市橋悌二（佐渡政党史稿登場人物）N-1802  
岩原伊三次（佐渡政党史稿登場人物）U-7-4-9.U-7-4-10  
植田五之八（民権家、金沢村）N-646.N-922.N-950.N-2016.N-2184.N-2321  
植田理太郎（政勢調査所準備、『第五議会に関する報告書』著者）N-303  
植田六十郎（民権家、金沢村）N-950.N-2184  
氏江市郎平（佐渡政党史稿登場人物）N-1217.N-1349.N-2359  
宇陀太郎妻アイ（宇田太郎：天保９年-明治23年、幕末-明治時代の尊攘運動家、自由民  
権運動家、天保９年10月24日生、慶応３年郷里の天領の上納金３万両を押さえ、新  
政府の太政官に納める、陸軍局、司法省などに勤め、明治８年大津の代言結社に参  
加、国会開設、条約改正などの建白書を元老院に提出、明治23年11月８日死去、53  
歳、大和出身、変名は春日鹿之助）N-1264  
榎武吉（佐渡政党史稿登場人物、明治25年越佐汽船支配人再選）N-1809

なり、信越鉄道の建設に尽力、明治14年鈴木昌司らとともに頸城三郡自由党を結成するが、板垣退助の自由党との接近に反対し、翌年に離党、大隈重信が立憲改進黨を結成すると、上越立憲改進黨を結成してこれに応じる、明治23年第1回衆議院議員総選挙に当選、以後5期にわたって議員を務める、明治29年に大隈が第2次松方内閣に外務大臣として入閣すると、多くの進歩党議員が政府に登用され、室も翌年4月に愛媛県の知事に任命されるが、11月に大隈が辞任すると、室もまた辞任)

P-30.W-2-20

目黒徳松（北魚沼郡須原村の目黒家は、並柳新田の関矢家同様、この地域の名望家、明治13年国会開設請願運動に関わり、15年には魚沼立憲改進黨を結成、25年の第2回衆議院選挙当選）P-47.P-120

本山健治（嘉永元年生、新保古新田村（現・上越市）の野口家に生まれ、幼くして菖蒲村（現・大島区菖蒲）の本山家の養子になる、明治6年第6大区戸長、以後は11大区小5区戸長などを歴任、明治12年には県議会開設とともに東頸城郡選出の県会議員、明治23年第1回衆議院選挙当選、明治25年第2回総選挙再選、前島や尾崎行雄らとの親交もあり、中央政界においても活躍、東頸城郡に民権思想を紹介し、新潟県農工銀行監査役などの要職を務める、大正8年没）P-43

文部省文書課 N-419

安岡雄吉（嘉永7年3月-大正9年11月1日、明治期の官僚、政治家、勲四等旭日章、土佐国幡多郡中村出身、明治11年内務省に入る、元老院御用掛を経て後藤象二郎の大同団結運動に参加、明治25年第2回衆議院議員総選挙に史克系から出馬し、自由党の片岡健吉・林有造を破るが、松方内閣が行った選挙干渉が問題となり、訴訟の結果当選無効となる、明治30年から32年まで欧州各国を視察、明治37年衆議院議員に当選）P-110

安田勲（嘉永6年6月生、千葉県議、同常置委員、徴兵参事員などを経て、明治23年衆議院議員当選（千葉8区）、以来通算6期務める、大正6年6月9日没）N-703

山際七司（嘉永2年-明治24年、明治時代の自由民権運動家、嘉永2年1月1日生、生家は越後の庄屋、自立社を設立して国会開設運動を起こす、明治14年自由党結成に加わり幹事、高田事件、大阪事件に関わり、大同団結運動、条約改正反対運動を進める、23年衆議院議員、明治24年6月9日没、43歳）U-7-1-3.U-7-1-4

山口千代作（嘉永元年-明治69年、嘉永元年2月24日西会津町生、明治11年福島県議会の準備会議員、同12年第1期県議会議員当選、県議会議長、副議長歴任、第1回衆議院議員当選）N-303

山本悌二郎（明治3年1月10日-昭和12年12月14日）、政治家、実業家、農林大臣、外務大臣の有田八郎は弟、号は二峯、真野町出、明治37年第9回衆議院選挙新潟1区当選、以後11回）N-1765.N-2330.R-31.U-3-2~5

横堀三子（サンシ、嘉永5年-大正3年、明治時代の政治家、嘉永5年9月生まれ、明治11年栃木県芳賀郡の書記、県会議員、議長を経て18年芳賀郡長、この間、塩田奥造らと国会開設請願運動に関わる、改進黨に加わり、23年第1回総選挙で衆議院議

- 発布で東京を追われる、明治21年出版条例違反で入獄、明治25年第2回総選挙に当選して衆議院議長、第4次伊藤内閣で通信相となったが東京市疑獄事件で辞職、明治34年伊庭想太郎に刺殺される) U-7-1-30.W-2-6
- 本間直 (第1回来議院議員選挙奈良区当選、佐渡出身) W-2-17
- 前田案山子 (カガシ、文政11年2月23日-明治37年7月20日、政治家、自由民権運動家、第1回来議院議員選挙熊本1区当選(1期)) N-387.W-6-18~20
- 牧朴真 (ナオマサ、嘉永7年3月29日-昭和9年4月29日、日本の官僚、政治家、実業家、県知事、衆議院議員、肥前国南高来郡島原村新建(現島原市)で、島原藩士・牧真成の長男として生まれる、明治8年長崎県等外一等出仕、同年2月福岡県に転じ十五等出仕・地租改正掛に就任後、史生、権少属、兼警部心得、少属などを歴任、13年4月太政官に転じ四等属・内務部勤務、以後審理局御用掛、参事院書記生、同議官補、法制局参事官、枢密院書記官などを歴任、22年3月に退官、その後、総武鉄道株式会社創立委員長となり、23年1月会社設立と共に社長に就任、25年11月まで在任、23年7月第1回来議院議員総選挙に長崎県第3区から出馬し、志波三九郎との接戦を制し当選、大成会に属す、25年2月第2回総選挙でも志波と大接戦となり当選、中央交渉部に属し、衆議院議員を2期務める、27年3月の第3回、第4回総選挙では志波に敗れて落選) W-2-12
- 増田繁幸 (文政8年-明治29年、幕末-明治時代の武士、政治家、文政8年6月生、陸奥仙台藩士、戊辰戦争では会津攻めの参謀として白河口に出兵、維新後、仙台藩大参事、宮城県会議長などを歴任、明治23年衆議院議員、25年貴族院議員、明治29年3月14日没、72歳、通称は歴治) P-23.U-7-1-28
- 松村文次郎 (天保10年3月2日生、明治12年新潟県議に当選、初代議長となる、北辰自由党に加わり自由民権運動で活躍、23年衆議院議員(当選2回)、柏崎活版印刷社長、愛蔵家としても知られた、大正2年9月23日死去、75歳) N-1782.N-2220.P-33.P-98. P-112.W-7-7.W-7-8
- 三浦安 (ヤスシ、文政12年-明治43年、幕末-明治時代の武士、官僚、文政12年8月18日生、伊予西条藩士、本藩の紀伊和歌山藩籍に移り、外交役を勤める、慶応3年坂本竜馬のいろは丸沈没事件を処理、このため竜馬暗殺への関与を疑われ、海援隊士に襲われ負傷、維新後は東京府知事、宮中顧問官を歴任、貴族院議員、明治43年12月11日没、82歳、本姓は小川、通称は休太郎) P-58
- 室孝次郎 (天保10年9月14日-明治36年6月21日、日本の政治家、衆議院議員(立憲改進黨→進歩党→憲政党→憲政本党)、愛媛県知事、名は方義、字は子成、号は桜蔭、越後国高田本誓寺町(現在の上越市)の商人市郎右衛門の長男、慶応2年京に上って勤王の志士たちと交わる、戊辰戦争中の明治元年7月新政府軍が高田に入ると、北陸道官軍御用掛を務め、さらに親兵隊に属して戦闘に参加、明治3年には高田藩の民政属吏聴訟断獄掛、ついで藩校助教を務める、廃藩置県後は高田病院の建設に尽力、明治8年には彌彦神社宮司に任じられたが、翌年辞任、明治11年第8大区長、高田中学校(現在の新潟県立高田高等学校)校長を兼ねる、翌年西頸城郡長と

明治初期の軍人、政治家、慶応4年板垣退助率いる土佐迅衝隊に加わり戊辰戦争に従軍、明治3年兵部省に出仕、翌年には御親兵一等士官、明治6年征韓論争で辞職、明治7年大蔵省に出任、再び辞職して帰郷、板垣退助を助けて立志社、愛国社、土佐民会の設立に尽力、明治11年立志社副社長、明治13年愛国社の副議長となり、欠席の片岡健吉に代わって国会開設の歎願の議論をまとめる、明治16年土陽新聞社長、明治20年言論、出版、集会の自由を建白するため上京するも保安条例によって投獄、明治22年帰郷、明治23年自由党幹事、翌年同志と自由倶楽部を組織し、明治25年2月の第2回衆議院議員総選挙で高知県第3区から出馬当選、以後明治31年3月の第5回総選挙まで連続4回当選、また第9回総選挙の補欠選挙で当選し、通算5回の当選を果す、明治31年第1次大隈重信内閣では警視総監、明治44年5月27日没)  
U-7-1-29

野沢卯市（佐渡政党史稿登場人物、第17回衆議院議員選挙新潟1区当選）U-7-1-39  
萩野左門（嘉永4年8月1日-大正6年12月30日、明治期の政治家、新潟県会議員、衆議院議員、栃木県知事、新潟市長）N-1287.N-1773.N-2006（鉄道協議会準備委員）  
U-7-1-5～7.P-127

長谷川泰（天保13年6月-明治45年3月11日）、幕末期の越後長岡藩軍医、「済生学舎」（日本医科大学の前身）創立者、内務省衛生局長、衆議院議員、従三位勲三等）  
W-6-7～9

波多野傳三郎（安政3年8月22日-明治40年2月13日、明治期の政治家、教育者、衆議院議員、官選福井県知事、旧姓・前田、越後長岡藩士・前田茂左衛門の息子、明治2年波多野影雲の養子、明治7年に上京し尺振八の共立学舎で学び、その後同教授、舎長を務める、明治12年嚶鳴社に加入、翌13年文部省出仕、翌14年退官して『東京横浜毎日新聞』入社、明治19年まで在社、明治15年立憲改進黨の結党に参加、その後もその立場を守る、明治21年新潟県会議員当選、明治24年5月第1回衆議院議員総選挙・新潟県第5区の補欠で当選、以後第2・4・5・9回総選挙で当選し、衆議院議員を通算5期務める、明治30年4月第2次松方内閣により福井県知事に登用、自由党の勢力が強い福井県会と対立し、波多野が消極的であった治水対策について、県会は波多野の不信任案である「治水に関する建議案」を可決、波多野は県会を解散したが、11月13日依願免本官となり退官、その他、宝田石油会社監査役、南北石油会社監査役、国有共同販売所監査役を務める）N-658

平林九兵衛（天保8年9月9日-明治42年6月14日、維新後は区総代、東京府会議員を勤める、明治25年衆議院議員に当選、政治家として活躍する一方、資財を投げ打って地元の発展にも尽力した、荏原郡大井町）N-1444

堀善證（第1回衆議院議員選挙兵庫2区当選）N-1545.P-104

星亨（嘉永3年4月8日-明治34年6月21日、政治家、元衆議院議員、江戸築地の小田原町（現在の中央区築地）左官屋生、維新後に横浜税関長、後に渡英して弁護士資格を取得、明治15年自由党に入り「自由新聞」により藩閥政府を批判、明治16年には福島事件で河野広中を弁護、明治17年に官吏侮辱の罪に問われ明治20年保安条例

谷干城（天保8年2月12日-明治44年5月13日）、幕末から明治にかけて活躍した土佐藩士、軍人、政治家、通称は申太郎、守部、号は隈山、明治18年第1次伊藤内閣の初代農商務大臣に就任、閣内の国権派として伊藤内閣の欧化政策（当時の外相は井上馨）を批判し、条約改正問題で辞任、後に貴族院議員、地租増徴に反対、独自の政治運動を展開、国粹主義、農本主義の立場から薩長藩閥とも板垣退助ら自由民権派とも異なる保守的な中正主義で、土佐派の重鎮として重きをなしていた）W-5-1

樽井（森本）藤吉（衆院議員、別名森本藤吉、号丹芳、丹木、嘉永3年4月14日-大正11年10月25日、大和国宇智郡靈安寺村（奈良県五条市）生、明治元年上京して、井上頼罔、林鶴梁に学ぶ、西南戦争時は西郷隆盛に加担、15年長崎県島原で東洋社会党を結成、社会平等と公衆の最大福利を綱領に採択したが、翌年逮捕される、出獄後「佐賀日報」の編集に携わる、のち大陸に渡り、上海で東洋学館の設立に参加、朝鮮独立党の金玉均に交わり、18年大阪事件に連座、25年衆院議員に当選（奈良3区）、東洋自由党を結成、一時森本姓を名乗り、28年旧姓（樽井）に復帰、30年には社会問題研究会幹事となり、足尾鉍毒事件にも関心を持つ、晩年は朝鮮や清国で鉍山を経営、著書に大アジア主義に基づく日韓対等合併を主張した「大東合邦論」や「明治維新発祥記」など）N-785.W-7-2

丹後直平（安政2年10月生、北蒲原郡議、新潟県議、徴兵参事員などを経て、明治23年新潟県郡部より衆院議員に当選、以後27年までの3期連続および35～37年までの3期連続の通算6回当選を果たす、大正9年3月17日没）N-793.P-39.P-121.U-7-1-2.W-7-9

角田真平（ツノダ、1857-1919、明治-大正時代の政治家、俳人、安政4年6月15日生、明治13年代言人（弁護士）、15年立憲改進黨の結成に加わる、東京府会議員、東京市参事会員をへて25年衆議院議員（当選7回）、俳句結社秋声会を主宰、大正8年3月21日没、63歳、駿河出身）W-2-13

帝國国会祝賀名誉表彰煙火会事務所（京橋）N-1103

鳥居錦二郎（慶応3年9月28日-大正8年5月25日、衆議院議員（立憲同志会→憲政会）、弁護士、越後国岩船郡村上本町（現在の村上市）出身、明治21年英吉利法律学校（現在の中央大学）出身、ついで代言人試験に合格、弁護士を開業、明治31年大阪区裁判所検事、翌年大阪地方裁判所検事、明治33年辞職、再び新潟市で弁護士に従事、新潟市弁護士会長、新潟県会議員、新潟市参事会員を経て、1915年の第12回衆議院議員総選挙当選、第2次大隈内閣で内務副参政官、その他新潟県教育会長、そのかわら新潟女子工芸学校校長も務める）N-521.N-911

中山小四郎（第7・8回衆議院議員選挙当選、河原田町）N-497.N-877.N-1043.N-1228.N-1251.N-1473.N-1615.N-1683.N-1764.N-1815.N-2248.P-79.R-5-1

西潟為蔵（地域の開発と国政に全力を傾けた自由民権家、30余年に及び村政・県政に尽力し、明治23年の衆議院議員当選以来、39年まで国政・県政の第一線で活躍、南蒲原郡生）N-2119.P-46

西山志澄（ユキズミ、天保13年6月6日-明治44年5月27日、幕末土佐藩の迅衝隊士、

選、所属した立憲自由党から脱党し、その後の選挙に2度落選、明治27年選挙で返り咲く) W-3-4

末松謙澄(安政2年8月20日-大正9年10月5日、明治・大正時代のジャーナリスト・政治家・歴史家、子爵、帝国学士院会員、豊前国前田村(のち福岡県行橋市)に大庄屋の4男として生まれ、東京師範学校(東京教育大学、筑波大学の前身)中退、東京日日新聞社の記者となり社説を執筆、岳父である伊藤博文の知遇を得て、外交官としてロンドンに赴任、ケンブリッジ大学で学ぶ、衆議院議員、通信大臣、内務大臣などを歴任) N-1083.P-93.U-7-1-42.W-2-3.W-6-1~3

鈴木重遠(文政11年-明治39年、幕末-明治時代の武士、政治家、文政11年11月19日生、伊予松山藩家老、大参事、明治11年海軍省に入り、20年退官、自由民権運動に従事、23年衆議院議員(当選5回)、自由党、進歩党、憲政本党などに所属、対露同志会などに参加、明治39年4月7日没、79歳) W-6-15~17

鈴木昌司(第1・2回衆議院議員選挙当選、新潟出) N-1.N-794.W-6-10.W-6-11

鈴木長藏(衆議院議員、新潟県選出、第7・8回当選) N-1854.P-42

関矢儀八郎(1858-1924、明治-大正時代の政治家、安政5年10月生、小学校長、新潟県会議員などをへて明治35年衆議院議員(当選3回、政友会)、シベリア東部の沿海州で漁場を租借し経営、露領水産組合評議員、同新潟支部長、大正13年11月21日没、67歳) P-29.W-7-6

曾禰荒助(嘉永2年1月28日-明治43年9月13日、日本の政治家、外交官、長州閥の1人として歴代内閣で大臣を歴任、第2代韓国統監として韓国併合を進める、長門国萩藩の家老の宍戸家の出身、宍戸潤平の3男として生まれ、通称寛三郎、曾禰詳蔵高尚の養子となり、曾禰姓を名乗る、17歳ながら家老格の家柄のおかげで長州藩兵の小隊長として戊辰戦争初期に従軍、明治維新後、明治元年明治政府に出仕、降兵取締に任じられ、明治5年フランス留学を命じられて5年後に帰国、明治12年陸軍省勤務、翌年から士官学校勤務を兼ねる、明治14年に太政官書記官に転じ、明治19年4月に内閣記録局長、明治23年に初代衆議院書記官長に任命、この任を2期務めた後、第1次松方正義内閣解散に伴って衆議院選挙に出て、山口4区から初当選を果たす、会派は品川弥二郎が主宰した国民協会に属したが、明治26年に駐フランス全権公使に任じられる、しかし日清戦争の後には駐ドイツ全権公使青木周蔵と共に三国干渉では列強にやり込められる、明治31年第3次伊藤内閣が発足すると司法大臣に就任、以後、農商務大臣、大蔵大臣、外務大臣等を歴任、特に日露戦争時は外債の不足に苦慮したが、大蔵大臣として大任を果たす、明治40年に初代統監府副統監として伊藤博文を補佐し、伊藤の退任後に韓国統監となる、伊藤暗殺事件の直後から韓国併合を進め、明治43年病により同職を辞したが、併合の完成を病床で聞いて没す、享年62、外交・内政・財政さらには韓国問題まで幅広くこなした万能政治家であったものの、二流政客と称され、長州閥の実力者に肩を並べるには至らなかった、このことから「器用貧乏」ともあだ名された) W-5-5

高岡忠郷(第1・5・6回衆議院議員選挙当選、自由党新潟支部幹事) N-1214.N-1562

[資料 - 4] 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

- 後藤五郎治（明治14年新潟県会議員、明治26年衆議院議員、新穂生）N-143.N-235.  
N-318.N-347.N-391.N-487.N-501.N-641.N-724.N-800.N-890.N-965.N-1051.N-1320.N-1425.  
N-1627.N-1653.N-1798.N-1801.N-1856.N-1953.N-1955.N-2040.N-2131.T-3-1-3-5
- 小西甚之助（1855-1928、明治時代の政治家、安政2年9月生、明治9年生地の香川県で翼賛社をつくり、13年元老院に建白書を出すなど、県の国会開設運動の中心となる、県会議員・議長をへて23年衆議院議員（第11回まで連続当選）、昭和3年6月28日没、74歳）W-1-8.W-1-10
- 駒林廣運（ヒロユキ、安政3年11月山形県生、山形県議、同常置委員を経て、明治23年第1回衆議院議員当選（5期）、また奥羽土功取締役その他数会社の重役となる、昭和10年11月23日没）N-660
- 小柳卯三郎（天保14年-大正4年、明治時代の政治家、天保14年3月生、自由民権運動家として国会開設運動に関わる、新潟県会議員、明治24年衆議院議員補欠選挙当選（当選3回、自由党）、県治水会の創立に尽くす、大正4年9月6日死去、73歳）N-1345
- 斎藤善右衛門（嘉永7年-大正14年、明治-大正時代の実業家、嘉永7年1月28日生、陸奥桃生郡の地主斎藤善次右衛門の長男、明治25年衆議院議員、斎藤株式会社、仙台信託の社長、斎藤報恩会を設立し、地方産業の開発、社会事業の推進に努め、大正14年7月25日死去、72歳）N-1402
- 坂口仁一郎（安政6年1月2日-大正12年11月2日、衆議院議員（憲政本党→立憲国民党→立憲同志会→憲政会）、新潟新聞社長、漢詩人としては坂口五峰のペンネームを用いる、長男はラジオ新潟社長・坂口献吉、五男は作家・坂口安吾）N-1680.N-2236
- 佐々木善右衛門（第1回衆議院選挙島根2区当選）N-2148
- 佐々友房（嘉永7年1月23日-明治39年9月28日、熊本出身の教育者、言論人、政治家、元衆議院議員、鵬州、克堂と号す、幼名寅雄、後、坤次）W-5-8~10
- 四宮有信（安政6年4月生、戸長、印旛郡徴兵参事員、学芸委員、千葉県議、明治27年衆議院議員に初当選、以来連続4期務め、また房総馬車会社をも経営、明治36年12月12日没）N-703
- 衆議院（事務局会計課）N-796.N-1210.N-2456~2511
- 白井新太郎（文久2年10月22日-昭和7年12月10日、実業家、政治家、号は如海、中国との貿易に従事し、明治24年には東邦協会の設立に関わり、幹事を務める、大正6年の第13回総選挙で若松市から当選）N-1930
- 柴四郎（東海散士）（嘉永5年12月2日-大正11年9月25日、明治から大正にかけての政治家・小説家、本名は柴四朗、安房国出身、明治25年以降福島県選出（進歩党・憲政本党）など衆議院議員として活躍（10回当選）、農商務次官・外務参政官などを歴任、条約改正反対運動に尽力）W-3-6.W-3-7
- 末廣鉄腸（重恭）（嘉永2年2月21日-明治29年2月5日、反政府側の政論家・新聞記者・衆議院議員・政治小説家、幼名雄次郎、後に重恭、号に鉄腸、子儉、浩齋、明治23年7月大同新聞記者の肩書で第1回衆議院議員選挙に愛媛県から立候補し当



議員を務める、1899年に引退して村上へ転居、新潟では羽越線を整備したり、新潟新聞社の創設に関わり、新潟の経済界に貢献、1921年村上で死去) N-2444.P-55.P-99.P-107

加藤六藏(安政5年-明治42年、明治期の政治家、醤油醸造実業家、三河国生、豪商にして代々郷士、豊橋で漢籍を修めた後、明治8年東京に出て慶應義塾に学び、愛知県第二中学校、豊橋商業会議所、鉄道等の設立に関わる、愛知県議会議員を経て、衆議院議員、東三倶楽部を組織し、立憲憲政党、中国進歩党等を渡り、憲政本党の要職を得る) N-1846

河島醇(アツシ、弘化4年3月6日-明治44年4月28日、幕末から明治時代に活躍した武士(薩摩藩士)、官僚、政治家、衆議院議員、貴族院議員) V-1-36

川真田徳三郎(安政7年2月13日-大正7年11月22日、政治家、実業家、衆議院議員、阿波国麻植郡出身、麻植郡会議員、徳島県会議員、所得税調査委員、徴兵参事員などを務め、阿波商業会議所会頭などを経て、明治23年の第1回衆議院議員総選挙に出馬当選(9回当選)、また阿波国共同汽船専務、阿波藍社長、徳島鉄道社長、阿波藍同業組合組長などを歴任) N-1402

久須美秀三郎(嘉永3年-昭和3年、明治-大正時代の実業家、政治家、嘉永3年3月15日生、明治13年新潟県会議員、日本石油、北越鉄道の創立に関わる、越佐新聞発行所長、越後鉄道社長を務める、35年衆議院議員(当選2回、憲政本党)、昭和3年1月18日死去、79歳) N-424

楠本正隆(天保9年3月20日-明治35年2月7日、肥前大村藩の武士、明治期の政治家、男爵、大久保利通の腹心として知られた、明治年5月24日に新潟県令、明治8年11月7日の離任までの間、大川津事件を鎮定、柏崎県を新潟県に併合、第四国立銀行設立など県の近代化に尽力、本邦初の国立市民公園の白山公園を開設、その他、県議会の開設や地租改正推進などに努め、大久保からは「天下随一の県令」と賞される、明治23年に衆議院議員) N-266

栗谷品三(第2～4回衆議院議員選挙大阪1区当選) P-61

桑原重正(信念の自由民権家、自らの主張の前に県も政府も、そしてかつての同志でさえも敵にまわした、後半生を秋山郷に捧げ、村民から「重正どん」と慕われた、明治35年衆議院議員に当選、秋成村の村民にとっては村長「重正どん」であった、それは、村長を明治24年から昭和5年まで40年間勤めたためである) P-3

河野廣中(嘉永2年7月7日-大正12年12月29日)、武士(三春藩士)、政治家、第11代衆議院議長、磐州と号、以後、大正9年の第14回衆議院議員総選挙まで連続当選) N-1.U-7-1-8

神鞭知常(コウムチ、嘉永元年8月4日-明治38年6月21日、明治時代の官僚、衆議院議員(当選計7回)、子に大蔵官僚の神鞭常孝と山座円次郎に嫁いだ娘がいる、文官高等試験委員長、臨時政務調査委員なども務め、大日本協会、国民同盟会、対露同志会などの組織結成に参加した) W-5-12

小金井権三郎(第2回衆議院議員選挙新潟5区当選、小金井良精の長兄) B-48.N-670

- 代)、内務大臣(第50代)などを歴任) V-1-36
- 井上角五郎(万延元年10月18日-昭和13年9月23日、日本の実業家、政治家、第1回衆議院議員に当選(広島県)以来連続当選14回、第47回まで14回代議士を務める、北海道炭礦鉄道社長、日本製鋼所設立者・会長、国民工業学院理事長、慶應義塾評議員等を歴任、大正9年緑綬褒章下賜、京釜鉄道、南満州鉄道の設立にも関わる) W-7-1
- 大江卓(第1回衆議院議員当選、土佐出身) N-1.W-6-12
- 大隈重信(天保9年2月16日-大正11年1月10日、日本の武士(佐賀藩士)、政治家、教育者、位階勲等爵位は従一位大勲位侯爵、政治家としては参議兼大蔵卿、外務大臣(第3・4・11・14・29代)、農商務大臣(第13代)、内閣総理大臣(第8・17代)、内務大臣(第30・32代)、貴族院議員などを歴任、早稲田大学の創設者で初代総長) Z-1
- 大竹貫一(万延元年-昭和19年、明治-昭和時代前期の政治家、安政7年3月12日生、明治27年衆議院議員(当選16回)、国権主義を主張し、国民党、革新党などをへて昭和7年国民同盟に属す、日露戦争では対露強硬論を唱え講和反対の日比谷国民大会を主催、大正時代には普選運動に取り組み、昭和19年9月22日死去、85歳、越後出身) N-276.U-7-1-37.V-1-48.W-7-3~5
- 太田實(安政5年9月20日-大正7年11月20日、明治の内務官僚、第2代本所区長、第1・2回衆議院議員(東京第5区本所・深川)、実業家、浅草公園水族館の設立者) N-617
- 大東義徹(オオヒガシ、天保13年7月-明治38年4月8日、官僚、政治家、司法大臣(第9代)、衆議院議員(7期)を務める、元の名は小西新左衛門) W-5-6.W-5-7
- 梶田喜左工門(第1回衆議院選挙愛知3区当選) N-2147
- 柏田盛文(嘉永4年3月22日-明治43年6月20日、明治期の政治家、官僚、ジャーナリスト、衆議院議員、文部次官、旧制第四高等学校校長、千葉県知事、茨城県知事、新潟県知事) P-109.W-6-4~6
- 桂太郎(弘化4年11月28日-大正2年10月10日)、日本の武士(長州藩士)、陸軍軍人、政治家、階級は陸軍大将、位階は従一位、勲等は大勲位) W-5-3.W-5-4
- 加藤勝弥(嘉永7年1月5日-大正10年11月5日、明治時代のクリスチャン、政治家、教育家、宗教家、越後国板屋沢村(現新潟県村上市)生、明治12年新潟県議会議会が設立されると、最年少25歳で当選、以降8回当選、自由民権運動に参加、明治16年高田事件で山際七司と共に投獄されるが免訴、明治17年大阪事件で入獄、明治17年5月に妻久子と共に村上教会で洗礼、それ以降、教寄屋橋教会(現、日本基督教団巢鴨教会)や市ヶ谷教会(現、日本基督教団西池袋教会)で長老を務める、日本基督教団伝道局長も務める、明治20年に阿部欽次郎、成瀬仁蔵と共に発起人になり、新潟に北越学館を設立、アメリカ合衆国アマースト大学を卒業した内村鑑三が明治21年5月に帰国すると、新島襄の仲介で仮教頭として招聘、東京角筈で母親俊子が経営していた独立女学校の理事や明治学院の理事なども務める、1890年には帝国議会の開設に際して、第1回衆議院議員総選挙に新潟2区から当選、以降3期衆議院

## 〔資料－４〕 鶴飼郁次郎宛書簡・葉書類発信者リスト

## 【国会・省庁・国会議員】

粟谷品三（文政13年3月生、銃砲火薬商を営む、戸長となり、しばしば大阪府議となる、明治23年衆議院議員に初当選、以来連続4期務める、明治28年11月10日没）N-1799

飯村丈三郎（嘉永6年5月24日-昭和2年8月13日、政治家・実業家、晩年は「報恩感謝」を掲げ教育者としても知られている、常陸国真壁郡上妻村黒駒の名主の子、茨城県において自由民権運動に加わり、その後、明治14年に茨城県会議員、明治23年には茨城3区から第1回衆議院議員総選挙に当選、その後も2回当選、頭取として第六十二国立銀行の経営再建を行い、さらに明治24年からは地方新聞のいはらき新聞の第2代社長、茨城県内を中心として初代水戸鉄道（現在の水戸線）をはじめとする鉄道の建設・運営にも関わる、晩年は教育を志し、昭和2年には水戸藩藩校の弘道館の流れを汲む水戸学院を引き継ぐ形で、私的財産を投入して旧制私立茨城中学校（現在の茨城中学校・高等学校）を設立、その後、東京府大手町でタクシーにひかれ、昭和2年8月13日没）W-2-22

磯部八五郎（明治31年第6回衆議院選挙当選、佐渡皆川出）N-86.N-164.N-230.N-315.N-479（東京）.N-500.N-533.N-724.N-1036.N-1081.N-1173.N-1320.N-1678.N-2098.N-2107.N-2258.N-2325（東京）.O-1-12.P-57（国中村）.Q-40.Q-41（東京）.Q-44.Q-156

市橋藤蔵（安政元年両津市梅津生、円山溟北に師事、17才で佐渡三郡（羽茂、加茂、雑太）勸業殖産下係、明治5年加茂歌代郷校読方補助、7年20才で梅津戸長、8年地租改正下調役、9年第26区（加茂郡）副大区兼小六区長、13年佐渡郡連合会議員、後に議長、22年梅津村長、33年県会議員、海底電線架設、中等学校教育拡張、皆川線、二見線の県道編入、加茂湖測量等に貢献、30年後藤五郎治の死亡により、補欠選挙で進歩党より衆議院議員に当選、31年3月15日選挙にも当選、34年町村併合による加茂村初代村長、大正10年白瀬川水力電気株式会社代表取締役、大正12年7月25日に69才で死去）D-6-39.N-131.N-365.N-527.N-604.N-1196.N-1256.N-1262.N-2113.N-2202.U-7-4-7.U-7-4-9.U-7-4-13

伊藤謙吉（天保7年-大正6年、明治-大正時代の政治家、実業家、天保7年2月生、判事となり佐賀、徳島の始審裁判所長を歴任、三重県大書記官を経て明治23年衆議院議員（当選2回）、高知県寒川鉱山を経営、東京歌舞伎座社長、東京株式取引所理事などを務め、大正6年2月24日死去、82歳、伊勢出身）N-300.N-653.N-1115.N-1402

伊藤大八（安政5年11月15日-昭和2年9月10日、政治家・実業家、帝国議会衆議院議員（5期）、長野県下伊那郡上殿岡村出身）V-1-36

稲垣示（シメス、嘉永2年8月20日-明治35年8月8日、明治時代の政治家、衆議院議員（第2、3、6回）、富山3区）N-387.N-785.N-1089.P-114.W-6-23

犬養毅（安政2年4月20日-昭和7年5月15日、政治家、位階は正二位、勲郎中国進歩党総裁、立憲国民党総裁、革新倶楽部総裁、立憲政友会総裁（第6代）、文部大臣（第13・31代）、通信大臣（第27・29代）、内閣総理大臣（第29代）、外務大臣（第45



記号	形態	主な内容	備考	点数	現状
M	行李（蓋付）	①明治～昭和戦前 現金出納、保険、権利書、陸軍命令書（鶴飼重雄）		8	149
N	木箱 （蓋なし）	①明治 郁次郎宛郁次郎宛ほかはがき（2500点） ②明治 鶴飼重雄宛書状、郁次郎生命保険契約書（61点）		2561	2728
O	紙箱・行李	明治～昭和戦後 郁次郎後夫入籍戸主換願、金銭出納・納税関係、鶴飼重雄卒業証書、郁次郎宛ほか書状		62	378
P	木箱（蓋付）	明治 郁次郎宛はがき		127	129
Q	漆塗文庫	明治 郁次郎宛新潟師範学校入学許可証、教員辞令、県会議員・衆議院議員当選状、書状、小柳卯三郎ほか肖像写真、経典		69	313
R	木箱（蓋付）	明治 郁次郎・市橋藤蔵・小池仁左衛門宛書状	箱書き「文化九年申正月七日 質地証文箱原黒村鶴飼源助」	49	107
S	木箱 （蓋かみ合わず）	明治 小作証文・地価調査上		49	200
T	たんす （引出し⑩）	①江戸末期～明治 葬祭帳（11点） ②明治 小作帳（15点） ③江戸末期～明治 郁次郎借用証書、金銭出納簿、道中記、嫁入・出産記、郁次郎葬儀帳（126点） ④明治～大正 諸種帳簿（75点） ⑥⑦江戸末期～明治 質地証文、願書ほか（23点） ⑤⑧⑨⑩⑪は文書取り出せず		254	444
合計				4372	

※K・Qはもとの容器に収納、ほかは県立文書館のダンボール箱に移し換えた。

記号	形態	主な内容	備考	点数	現状
U	ガラス戸棚				325
V	地券（約180枚他）				403
W	木箱入卷子7巻				163
X					11
Y					15
Z					15
合計					8043

[資料-3] 収納容器別一覧票

[資料-3] 収納容器別一覧票

記号	形態	主な内容	備考	点数	現状
A	木箱 (蓋なし)	江戸中期～明治 宝永元年(1704)が上限、質地証文・ 借用証文ほか		181	217
B	行李	江戸～昭和戦前 代議士鶴飼郁次郎君慰勞会・園遊会出 席者名簿、条約改正研究会報告、郁次 郎宛書状、書籍代金受取(鶴飼文庫の 成立)		66	254
C	紙箱(蓋付)	江戸 買物覚、証文断簡などが少量	箱書「通用講證文箱 講仲間中 此箱者 源輔方二而拵申候」	18	30
D	たんす (引出し①～ ⑩)	②江戸末期 金銭借用、土佐光武・酒井抱一画 (52点) ③江戸末期～明治 書状(2点) ④明治 「鶴飼郁次郎」の幟(1点) ⑤明治 郁次郎宛ほかはがき・書状(26点) ⑥明治 勸定書(22点) ⑧明治 郁次郎宛ほか書状(161点) ①⑦⑨⑩は中身なし	張紙： ①「浜畑家敷」「田地 畑山」「屋敷証文」、 ②「潟上両村」「東 国中」「西国中」、③ 「潟端より□□迄」 「黒ノ目東」「西原 村」「住吉村」「田野 沢村」「正明寺村」	264	669
E	行李・風呂敷	①明治 鶴飼重雄宛はがき・書状(237点) ②江戸末期～昭和戦前 質地証文・借用証文、旅行記、天明 7年酒造譲渡証文、新潟師範学校生 徒集合写真(羽生郁次郎あり)(263 点)		500	852
F		浄土真宗関係		43	43
G	木箱(蓋付)	軸物、鶴飼家過去帳写、写真		36	40
H	ダンボール箱	江戸～昭和戦前 「日本憲政の確立と鶴飼郁次郎」原稿、 相川町割絵図、鶴飼重雄葬儀関係		40	121
I	プラスチック 衣装ケース	明治～昭和 郁次郎宛書状、雑誌、俳句集、佐渡全 図断簡		11	62
J	木箱・紙袋・ 紙箱	江戸、昭和戦後 本願寺からの懇志請取状、日の丸旗、 鶴飼宗賢宛裏千家談交会関係、御文集 4巻		6	331
K	木箱 (特製箱)	經典		22	24
L	木箱(あるいは 露出)	徳富蘇峰夫妻写真、法名書、六字名 号、東京真宗婦人会		6	14

フォンド	サブフォンド	シリーズ	サブシリーズ
	家政	家計 冠婚葬祭 見舞 諸届 諸品預 功労者 書翰・葉書類	源助宛 源五郎宛 玲吉宛 重雄宛 五郎宛 封筒・包紙
	郁次郎関係	羽生家 教員 衆議院議員  章典 追悼会 書籍代金書上 書翰・葉書類	選挙 規則 議事録 政党 条約改正 新潟浦塩間航路拡張 海底電線敷設 兵役税法 曹洞宗紛糾調停 園遊会 感謝状

[資料-2] 鶴飼家文書目録編成 (未完)

ファンド	サブファンド	シリーズ	サブシリーズ
鶴飼家	村役人(地方三役)	年貢代納 御蔵組合 御蔵敷 土地証文  土地開発 小作 金銭貸借 金銭預 金銭勘定 質物 頼母子 講 救恤 通行	質取 質地出入 買取 譲渡 塩畑
	河崎村役場	開墾	
	経営	土地 土地証文  地租 土地所有権登記 小作 小作証文 作徳米 家屋証文 木買取 金銭貸借 金銭受取 金銭書上 金銭出入 手形紛失 講	境界 質取 買取 質地出入 売渡 売買 替地 境界 通行 山見廻  質取  買取



西暦	年号	年齢	
1895	28年	40歳	第三期総選挙に立候補せるも自由党、改進黨連合推薦の松本八十八氏に敗れる（287 vs 193）。同年7月 再度の総選挙に国権派の先輩 後藤氏を候補に推し当選せしめる。日清戦争起こり 広島で召集された議会で 後藤氏を補翼。この頃より 敵党の計るところとなり選挙法違反で訴えられる。同派中山小太郎氏が被告として幽閉さる。
1897	30年	42歳	相川区裁判事用某犯罪の嫌疑をもって予備審に付され 同年3月偽証罪として拘留され体罰等をうける。同年6月 釈放。健康を害す。（この年 重雄 仙台中学入学）
1898	31年	43歳	改進黨、革新党、新国権党の三党が合体し 進歩党となる。
1899	32年	44歳	憲政党が出来る。この頃より 政界に活動する意思が減退、佐渡郷土史料の蒐集、奇書珍書の蒐集、或いは古銭の蒐集に傾倒。自らを萬花楼と号す。
1900	33年	45歳	この頃より 肋膜炎を患い 新潟病院にて治療。
1901	34年	46歳	7月新潟病院入試するも薬石効無く 9月27日 午前5時 逝去。尚、夫人「なお」も東京浜田婦人科病院にて入院加療中であつたが 夫に先立つこと2週間前の9月14日逝去。

鵜飼郁次郎 建議案等

現行外交条約廃案に関する建議  
新潟浦塩間航路拡張建議案  
海底電線敷設に関する建議案  
兵役税課賦の建議案  
曹洞宗紛糾の調停

[資料-1] 鵜飼郁次郎 年譜 (鵜飼重行氏作成提供)

西暦	年号	年齢	
1884	17年7月	29歳	郡立佐渡中学校を依願退職。
1885	18年1月	30歳	新潟県加茂郡県議員に立候補、当選。教育軽佻の世情に対し教育振興に力を注ぐ。 島内中央線(本線)道路開鑿を具体化実施。これに伴い各町村の利便性を考慮し 郡役所を相川から河原田(現佐和田)に移転せんと県の同意を得 内務大臣に建議。しかしこの為に相川青年壮士より暗殺状を受ける。(明治21年12月)
1889	22年	34歳	越佐同盟会(自由党系)に入会。
1890	23年7月	35歳	初回衆議院議員選挙に立候補。改進黨益田克徳を破り当選(投票数 445票中 257票獲得)。 明治15年以来毎年請願の全国離島海底電線敷設を内務大臣に建議。
1891	24年  8月	36歳	越佐海底電線敷設運動が漸く実り、承認、敷設となる。尚、承認されたのは佐渡のみ(他の離島は承認されず)。 また、相川一局のみの原承認に対し 夷と小木分局の増設を建議し承認を得る。 海底電線敷設は明治24年10月に完成。 立憲自由党(板垣退助党首)に入党。 この年 兵役税法案を建議、陸海軍の賛同を得しも発布に到らず。
1892	25年1月  2月	37歳	雑誌「回天」を発刊し政府の現行外交条約の改正を迫る(明治15年1月7日初刊)。 第二期衆議院議員に再選される。 立憲自由党を脱退し 国権派を組織。当時国権主義を推進の前田案山子、武井綾夫氏と共に政府の現行外交条約廃棄を建議。
1893	26年	38歳	議会で豪州、欧州の二大航路拡張建議の修正建議を提出。
1894	27年	39歳	曹洞宗紛糾(総持寺vs永平寺)に関する国会演説、調停。

## [資料 - 1] 鵜飼郁次郎 年譜 (鵜飼重行氏作成提供)

西暦	年 号	年齢	
1855	安政 2 年		7月21日 真野村大字竹田 羽生甚左衛門の三男として生れる。 2兄、1姉、1妹あり。長兄、長姉早逝し 竹田家は次男英三氏が継ぐ。 幼年期は郁蔵と呼ばれ、同村 医師 森玄達に就き漢書素読を学ぶ。  父甚左衛門は俳諧に親しみ 京、江戸に遊び「荒海集」なる句集一巻を遺している。 また、書を 巻菱湖に学ぶ。(明治7年没) 母タマは畑野村吉田源四郎の長女、温厚 篤実の人。(明治36年没) 妹ヒサは文芸評論家青野季吉(昭和46年没)の母。
1867	慶応 3 年	12歳	相川奉行所による修教館にて圓山溟北の門下生となり 和漢の学を塾頭まで修める。
1872	明治 5 年	17歳	同 修教館を去る。
1875	8 年 4 月	20歳	選抜により 官立新潟師範学校に入学。
1876	9 年 12 月	21歳	同 学校を卒業。 同年 学術振興の運びにあった東京府学務より 六師範学校に人材輩出の要請あり、これに選出され翌10年1月より東京府学務課備となり府立師範学校に入り 学制その他の改良方法の調査、議定に従事。その後同校の六等教師として 普通学取調を担任、靈岸島小学校の校長を兼務。 また、在京中は成島柳北、島地黙雷等に就き文学、仏教学を研修する。
1879	12 年 12 月	24歳	母親の命により帰郷。圓山溟北塾に再度入門。愛郷論を著す。
1880	13 年 11 月	25歳	全国に国会開設の世論高まるに当たり 同志と計り国会開設哀願書を元老院太政大臣三條実美宛てに提出するも却下され受け付けられず。各府県の同志と計り国会開設期成同盟を組織し会員となる。
1881	14 年 10 月	26歳	相川中学校三等教諭となる。
1882	15 年 10 月	27歳	同校を依願退職し 上京。
1883	16 年 3 月 9 月	28歳	郡立佐渡中学校の教諭に任じられる。 加茂郡河崎村原黒 鵜飼家に後夫として入婿。

【特別講義 紹介】

日本文学研究専攻は、大学院博士課程としての基本教育機能の充実はもちろんのこと、本専攻の学生の専門性を高めると同時に、広く深く教養と知識を身につけ先進的な日本文学研究を行う優秀な人材を育てていこうと、特別講義というものを開いています。

特別講義は、日常の授業では触れられない角度からテーマを設定して、カリキュラムにはない基本的、応用的、先進的な研究動向などについての講義を行います。講師は、個々の専門的なテーマに基づき、その分野でご活躍中の専攻内外の研究者をお招きして講義をお願いします。

その講義録を後日一冊の形にして作成し、多くの方にその豊かな内容を知っていただくとともに、日本文学研究専攻の活動の一環をも知っていただこうとしています。

なお、特別講義は本専攻のみならず、総合的研究大学院大学の全研究科に開かれています。

講師紹介（講義日現在）

山田 哲好

国文学研究資料館・研究部・准教授

総合研究大学院大学文化科学研究科

日本文学研究専攻 准教授

主要著書

『近世・近代の地主経営と社会文化環境』（共著・

名著出版 二〇〇八年）

『松浦武四郎研究序説―幕末維新时期における知識人

ネットワークの諸相―』（共著・笹木義友・三浦

泰之編 二〇一一年）



特別講義

〈第30号〉

---

最後の文書整理と目録編成  
—佐渡国加茂郡原黒村（現・佐渡市）鶴飼家文書—

講義日 2015年（平成27年）1月7日

発行日 2015年（平成27年）3月31日

著者 山田 哲好

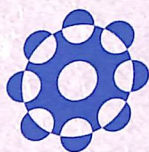
発行者 総合研究大学院大学文化科学研究科

日本文学研究専攻

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

電話 050-5533-2915・2916 FAX 042-526-8604

---



総合研究大学院大学  
日本文学研究専攻